
不幸な少年の冒険

フルム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸な少年の冒険

【Zコード】

Z3367M

【作者名】

フルム

【あらすじ】

樂しみだった新しい高校生活。それなのに柳瀬渡は登校日初日に寝坊してしまった。小さな不幸から始まる少年の冒険。恋あり、笑いあり、涙なしの柳瀬渡の冒険譚！～この物語には主人公無双はありません。あらかじめご了承ください～

～事の始まり～（前書き）

初投稿です。生暖かい眼で見守つてください

～事の始まり～

「ん……んう」

壁に小さく切り抜かれたような窓から日光が差し込んでくる。その小さく切り抜かれた日光が柳瀬_{ヤナセ}渡_{ワタル}の顔を直撃した。

渡は上体を起こすと大きく伸びをした。ついでにあぐびをする。

「うん、気持ちのいい朝だ」

そう呟いて窓の外をのぞいてみる。そこには、

忙しそうなサラリーマンと既に真上までのぼった太陽があつた。

……ん?

渡の思考が停止する。

今日は待ちに待った高校の入学式。昨日の夜も緊張で眠れなかつたぐらいに楽しみにしていたのだ。誰かに言つたら笑われそうな理由で眠れなかつたわけだが、それほどに高校というものが楽しみだった。

それなのに、

登校日初日に、

寝坊した。

渡は直感した。

そして絶望した。

「なんだつてんだあああ～！～～～！」

度はハツ毛クラスの笑ハ毛のだつた。

ドジだし、どこか抜けているし、臆病だし、背はちつこいし、制服はぶかぶかだし、丸眼鏡だし。

最後の方は関係ないと思うがクラス全員で渡を笑っていた。
いや笑っている本人たちにとつてはただ見ているのが面白かつたからちょっと弄つていただけだった。 だが当の本人からしてみれば全く迷惑極まりない事であつた。

何か行動を起こすたびに笑いが起き、皆が自分を指差して笑つて

そんなクラスが渡は嫌いだつた。

だから高校に期待していたのかもしれない。

だがいきなり始業式をサボったのだ。

本人にその意思はないとはいえた事には変わりない。

そのせいで自分はまたクラス全員から笑われることになるのだろう。

「はあ～…」

ため息が出るのも仕方がないだろうと思う。

ため息をつくと幸せが逃げるとか聞いた事があるがそんなことはどうでもいい。

ため息をつかないとやつていけないのだ。

そうしてひとしきりため息をついた後、暇になつたので仕方なくそこらをぶらつく事にした。

もちろん学生の下校に被らない時間帯だ。

自分の不幸を呪いながら散歩コースを歩く。

散歩コースといつても自分の家を出てひたすら人気のなさそうな道を歩く事だ。

だから特に決まった道があるわけではない。

そのままぶらぶらと歩いていたらマンホールの所に通行止めの看板が置かれていた。

すぐそばでは工事中らしきおっちゃん達がそれらしい作業服を着て作業している。

戻つても何もすることはないのだけれどお邪魔する事にした。

「……失礼します」

搔き消えそうな小声で断りを入れつつ静かに通り過ぎようとする。マンホールの蓋が開いていることを確認しつつ、落ちたくねえよな、と心の中でつぶやいた。

そのとき、

「そこのクソガキイ！ 仕事中って看板が見えねえのか！……」

すぐ隣の、どこかの組に入つてそうなヤクザっぽい人が大声で怒鳴つた。

「ツ！ す、すみま……」

素直に謝ろうとしたのだがあまりに相手の声が大きすぎたため後ずさりしてしまつ。

しかし、その脚をマンホールの蓋に引っ掛けてしまった。

(うわつーあぶなー！)

渡はバランスを取つて後ろひじをつつけよつとしたのだが、その脚がマンホールに入つてしまつた。

重心を乗せていた足が見事にマンホールに入つてしまい、マンホールに吸い込まれる渡。

(ーーー？ つー？)

無我夢中で手を伸ばしたが、その手は空を切り、渡はそのままマンホールに落ちていつた。

～事の始まり～（後書き）

感想とかいただけると励みになります。なんでもいいので感想になつたことをぶつけてください。

次からちゃんとファンタジーになるはず・・・

「神の氣まぐれ」（前書き）

自分の文章力の無むにつきやつする自分。

「神の氣まぐれ」

「はつー」

視界がいきなりまぶしくなつてがばつと起きた度。視界に入つたものは、無かつた。

正確には真つ白だつたから何も眼に映らなかつた。そんな白い空間の中にいる自分はなんだか場違いな気がした。そんな空間でしばらく思考の整理をしていると後ろから声がかかつた。

「あら? 一番乗りで私の元にやつてきたのは将来有望な若者か」

びつくりして振り返る。

そこには金髪巨乳童顔口リ美少女が立つていた。

(かわいい、じゃねえか)

こんな緊急事態でもこんな事を思つ」とが出来る自分にまた少しだけがつかりする。

しかも自分はロリコンではない。自分は変な性癖を持つてしまつたのだろうか、とショックを受けた。

それにして……

「お前誰だ?」

率直な疑問だった。

「あー、皿口紹介がまだだつたね」

セイで金髪（略）少女は一呼吸おいてから言つた。

「私は神だ」

渡の思考がまた停止しそうになる。

「いつはバカか？
頭はいかれてないのか？
たぶん迷子になつてしまつて寂しさのあまり変な事を口走るようになつてしまつたのだろう。

「君、お母さんかお父さんはどうしたの？はぐれたの？」

渡はセイの言つて金髪少女に手を差し伸べた。

「馬鹿にすんな！ 私は正真正銘の神様だ！…」

「いや、あんたみたいなロリータが神な訳がないでしょ。日本がその文化で染まつていろと思つたら大間違いだよ？」

すると金髪ロリータはさらに怒つて、

「ざけんな、たかが人間」ときが…！ 貴様なんて私の力をもつてすれば命など無いぞ…！…！」

渡は金髪ロリが本気で怒つてるので下手にこれ以上されると手

がつけられないと思い、ひとまず金髪口口にあわせる」とした。

「あーあーわかったよ。あなたは神様なんでしょう？ で、その神様が私に何の御用でしょうか？」

明らかに馬鹿にされているのが分かる言動だったが、怒っていても始まらないのでとりあえず神はこらえる。

「…………まあ分かればいいんだ……。本題に入るが、お前は今お前に置かれている状況をちゃんと分かっているか？」

渡はやはりこいつは頭がおかしいのかと思つ。が、怒られては話が進まないので一応乗ることにした。

「状況つて？ この白い空間の事か？」

「それも含めてだが……。その様子だと覚えていないようだな……」

神はそこで言葉を区切つた。渡に考えさせる時間を置いてから、しかし渡が分からぬ素振りを見せるのではつきりとこつてやつた。

「柳瀬渡。お前は死んだ」

……は？

渡には訳が分からなかつた。

やはりこいつは頭がおかしいのかと思い、口を開けにしたそのとき、

「うるさい！ 私は正常だ！ 正常に神だ！ 全く最近の若者は話を聞かんで困る……」

先を越された。渡は出鼻をくじかれたので仕方なく神に質問してみる。

「俺が死んだってのは、どうこうことだ？ 俺は生きているじゃねえか」

「違う。今のお前はただの残留思念だ。いわゆる魂とこうやつだな」
「こいつの言っている事が全く分からぬ。そつ考えていると様子で分かつたのか彼女は丁寧に教えてくれた。

「お前はな、マンホールから真っ逆さまに落ちて死んだんだ。でかい声にビビッて蓋に足引っ掛けで、な」

そう言われて渡はだんだん頭が冴えてくるのが分かつた。
怒鳴られた時の感情、足を引っ掛けた時の恐怖、落ちるときの絶望感。

「その様子だと思い出したようだな

「ああ……。俺って、死んだのか……？」

「ああ、死んだ」

彼女はぱつさつと切り捨てた。

やりたいことはたくさんあった。高校に行くのが面倒くさくなつ

たけど、楽しみにしていたのも事実で、青春を謳歌してやるーなんて思つてたのに・・・
まだ15歳の、高校生になりきれなかつた心には「死」というものが重すぎた。

「はは……俺死んだのか……ははっ」

乾いた笑みがこぼれてくる。死んだのは分かっているが認めたくない。

どうしようもない絶望感に潰されそうになつている時に彼女は言った。

「確かにお前はまだ高校生にもなつていない未熟な魂。死んだのは単なる不幸としか言こよつがない。」

だがな、といつて彼女は言葉を繋げた。

「お前には最高にツいているよつだ。」

死んだのにツいてこむとは、ビツコツことだ? と渡は首を傾げる。

「お前はな、私が神に就任してから一番最初の死者なのだ。私は就任したら一番最初の死者を生き返らせることにしていたんだ。まあ神の気まぐれといつやつだな」

渡ははつと首をあげた。

「じ、じゃあ俺は元の世界に戻れるのか!?」

すると彼女はいつ返した。

「確かにお前はまた生を受け、再び生き返る」とが出来る。」

しかし、世の中はそんなに甘いものではなかつた。

「お前が生き返るのは元の世界ではない。また別の世界だ」

……は？

渡には意味が分からなかつた。
別の世界つてどうことだ？

「元の世界に戻してやりたいのは山々なんだが、元の世界に生き返るのは厳しく禁じられている。だから私はまだやり残した事がある者や未練がある死者を最初の一人に限つて別の世界でやり直させることができるようになした」

思考が追いつかない。

別の世界だつて？

「ま、まで神。別の世界つていうと、あれか？ 並列世界とかいうやつか？」

「お前らの世界ではそう呼ぶのかもな。他の世界では異世界だのなんだのといつているがな。」

渡はパラレルワールドとかそういうのをあまり信じていない。が、

今の彼女が言うとんにか説得力がある。

「まあとりあえず、だ。お前を違つ世界で人生をやり直しすることが出来る。まあその世界はお前の世界の常識は通用しないだろうし、分からぬ事も多いだろう。人間といつ種族がいない世界もある」

渡は彼女の言葉を呆然と聞いていた。

パラレルワールド……？ そんなものあるのか？

「まあお前がそれを望まないのならばこの話はなしにして、お前はこのまま輪廻の環に加わり、人格も何もかも書き消されてまた新しい存在に生まれ変わるだけだが」

彼女は試すような眼でこちらを見ている。

渡は決心した。

「……やつてやうひじやねえか」

彼女の眼の色が変わった。

「そつか、私の希望にこたえてくれる奴で嬉しいよ

神はそういうて白い空間に座った。

「だが、ちょっと面倒くさいのがあつてな

渡は耳を立てた。

「お前がこれから行く世界には『科学』の変わりに『魔法』がある

んだ」

「魔法つてあれか？ファイとかブリザとかケルとか」

「そんなFみたいに便利な奴ではないが、大体そんなもんだ」

「そつなのか……。で、問題つて？」

神はいった。

「魔法というのは魔力……まあ分かりやすく言えばMP見たいなのが必要なんだ。その世界の魂ならば全ての種族、全ての生物が持っているものなんだが、お前はその世界の魂ではないから魔力がないんだ」

渡はショックだった。魔法は男の浪漫だ、と渡は思っていたのに。

「だから魔法分のハンデを何か一つ願いをかなえることで無くそつと思つたわけだ。」

「じゃあ俺にも魔法使わせてくれよ！」

「それは無理だ」

神はきつぱりと言ひ切つた。

「それはお前がその世界の住人ではないからだ。魔力というのは魂から生み出すもの。私が直接魂に、関与できればいいんだが、魂に関与す事も神であろうと厳しく禁じられている。だからお前は魔法をつかうことはできない。私も結構無理をしているんだぞ？」

渡は「」で自分の夢が潰えた事を知った。……くそっ。

「じゃあ、魔法以外ならなんでもいいのか？」

「お前の世界の理が通じるものならな」

「つーん、と渡は頭をひねる。

魔法以外といわれると中々出でこない。

空は飛べない、科学を持つていっても壊れたらそれまで……。

「自分の体を強化する」としかないんじゃないか？」

「私もそう思つ」

「」のロコータ神め……！

「じゃあお前の体を強化するところまでいいな？」

「ああ、やうしてくれ」

そういうと神の手がぽわん、と淡い青で光り始めた。

「はつー。」

神の掛け声とともにその光は俺のまつに飛んできて、そのまま体の中に入つていった。

なにからだの中で動いている感覚がある。はっきりって気持ち悪い。

「なあ、なんか体の中を動いているんだが」

「ああ、もうすぐで慣れるはずだ」

神がそういう直後、体の中のものの感覚は消えていった。

その代わりに自分の中の何かが燃え滾っている気がする。

「これでお前は今から行く世界の住人よりも強い力を手に入れた。だが上には上がいる。気をつけろよ？」

神はまた立ち上がりながらぶつぶつ言ひ出した。

それから床にむけて力を放つ。

すると床に真っ黒い円形の紋章みたいなのが出てきた。

「これに乗つかれば別世界に行くが……心の準備はいいか？」

準備なんてとっくに出来ている。

「ああ、大丈夫だ」

「そうか……何か連絡があつたら」ちらからかける。じゃあ、いつこい！」

「おう！」

渡は紋章に足を踏み入れた。

その瞬間渡は言いようもない浮遊感と眩暈に襲われた。

「そうそう、言い忘れていたがお前の称号は『神の使い』だ。忘れるなよ？」

なんて言つたか全く聞こえなかつたんだが……。

＼＼＼＼＼

気が付くと何か祭壇みたいな場所に立つていた。

周りには大勢の人々。

いや、人に猫耳犬耳尻尾翼等がついた、人型の生物が大勢いた。髪の色や眼の色、身長や老若男女関係なく様々な変な人たちが祭壇の周りに集まっている。

「……え？」

周りの人たちはざわざわ、と騒がしい。

渡も思考が停止していると、後ろから声がかけられた。

「おいお前。お前は……その、『ヒト』か？」

渡が振り返るとそこにはいかにも姫様といつ人が立っていた。

白を中心としたドレスを身にまとつていて、金色の髪を背中まで伸ばしている。王族みたいな雰囲気もぴったりだ。

「ん、ああ。確かに俺は人間だが……」

渡は突然の事だったのでついそのまま答えてしまう。

「やうか。……おいお前らー。こいつを連れて行けー。」

姫らしき人がそばに控えていた兵士に声をかけると、兵士は渡を羽交い絞めにする。

「おい！ なんだお前らー。俺を放せー！」

渡は兵士に捕まり、そのまま連れ去られていった。

……いきなり嫌な予感がする。

～神の氣まぐれ～（後書き）

感想お待ちしております

～覚醒～（前書き）

なんだか話が進むたびに一話一話が長くなっているような・・・

「念のためにもう一度聞く。……お前は『ヒト』だな？」

目の前の姫様はこういった。

今渡が置かれている状況はこうである。

二人の兵士によつて連れ去られた渡は、いかにも『貴族の家』といつ国会議事堂よりも大きな屋敷に連れて行かれた。
そこの小さな部屋に押し込められ、10分ほど待たされた後に先ほどの姫が2人の護衛を引き連れてこの部屋に入ってきたのだ。
姫は白を基調としたふりふりのドレスを身にまとっている。
髪の長さは大体セミロングといったところだろうか。
いかにも姫様という感じだ。

そして姫は開口一番こういった。

「念のためにもう一度聞く。……お前は『ヒト』だな？」

「ああ、まあ人っちゃんあ人だな」

渡がそう返すと姫は頭を抱えて悩んでしまった。

「私が……」この私がヒトを召喚か……」

姫が頭を抱えて悩んでいるが、渡にはそれよりも聞く事がある。

「おこあんだ、じじいはどーだ？ お前はなんていうんだ？」

渡が聞くと後ろの護衛の一人が反応した。

「貴様！ ヒトごときが王族である姫様になんという言葉遣い！
……姫！ やはりこいつは何かの手違いです！ 即刻処刑すべきです
！」

口を開いたのは猫の耳と尻尾をつけた女性の騎士。
騎士らしく鎧を着ているが兜を外しており、一本に結つた長い銀
色の髪を垂らしている。

腰の剣に手を当てて、臨戦態勢になっている。

「まあまあミーシャ。 もつ少し聞いてみたい事がある。」

今にも渡に斬りかかるつとするミーシャと呼ばれた騎士。
するとミーシャはひとまず剣から手を放した。
だがいまだに渡の事をにらみつけたままである。
姫はミーシャから視線を外すと渡に正面から向かった。

「さて、ヒトよ。 お前は何と書つ？」

「俺は柳瀬渡といつ。 お前は？」

一言一言渡が言葉を発するたびに後ろのミーシャがぴくぴくと青
筋を立てているが、渡は気が付かない。

「お前、私を知らないのか？……その名前といい、その格好といい、
黒髪黒眼も珍しいし、何より王族であるこの私を知らないのか……」

姫はうーんと唸つたまま黙つてしまつ。

しばらく氣まずい空気が流れる。

すると姫がそのまま氣を破るよつと呟つた。

「じゃあまーす、紹介だな。私はシルビア・ヴァイル・ガータンス。この王国の第四王女だ」

渡はそれを聞いた途端、『ふつー』とふきだしてしまつた。

なぬ！ 王女とな！？

じゃあそれなりに敬意を払わないといけないのかな……？

といつてもいきなり態度を変えてはちょっと恥ずかしいし」のままでいいや、と渡はスルーした。

「王女様……。へえー」

「つー、貴様あ！ どれだけ姫を侮辱すればすむのだ！？ へえー、はないだろへえー、はーー！」

こきなつミーシャに怒られた。思つたことを呟つただけなの……

「ミーシャ。お前少し出でな」

と、そこで姫の冷たい宣告が出た。

「んなつー、何故ですかー？ 私はこいつが姫に対してもうまつても無礼だから……」

「お前がこると話が進まん。テニク。こいつを連れ出してくれ」

シルビアがそういうとビートークと呼ばれた青髪の頭に角が生えた騎士はリーシャを羽交い絞めにしてこの部屋から出て行ってしまった。

「姫！ そんな野蛮人と話してはなりません！ そのような者は……」

ミーシャの言葉は最後まで届かず、この部屋からいなくなつた。部屋には渡とシルビアだけが取り残され、静寂が一人を包んだ。

「……ふう。悪いな、根はいい奴なんだ。許してやってくれ

「いや、気にしてませんよ」

「そうして貰えるとありがたい」

そういうってシルビアは微笑んだ。
ちょっと可愛かった。

年は同じくらいだろうがまだ幼さが残る笑顔で、こう、グッとするものが……

「さて、本題に入るが……」

シルビアの言葉で現実に戻つてくる渡。
顔がにやけてないかどうか、顔をグーグーする。

「なんでしょ？」

「お前は何者だ？」

その質問に渡はぽかんとする。

「いや、柳瀬渡だつてさつやれ……」

「名前の事じやないヤナセ」

「あ、名前が渡で苗字……ファミリー・ネームが柳瀬」

「む、そつか。ならばワタル」

シルビアはそこに言葉を切った。

「はー?」

「何故お前は召喚の儀の場で召喚されたのだ?」

渡は悩んだ。

召喚の儀とはさつきの祭壇での事だろうが、何故かなんて自分にも分からぬ。

「それが……俺にもわからないんだ。気が付いたらあそこへいた

「そうか……」

そういうてシルビアは黙り込んでしまう。

そういうえば……

「それだと何かやばい事でもあるのか?」

「やばいもなにも、王族である私が隸族であるヒトを召喚してしまつたら国の信用に關わらうが！」

「やばいもなにも、王族である私が隸族であるヒトを召喚してしまつたら国の信用に關わらうが！」

「……隸族？」

隸族といつのはこの世界での奴隸の民のことなのだらうか？

「ヒトって奴隸なのか？」

「おま……そんなんも知らないのか？ もしかしたらお前は秘境の民なのか？ それならば色々と納得がいくが……」

シルビアはそういつてから黙り込んでしまつた。
ヒトが奴隸？

信じられん……

「何も知らん奇妙な奴隸か……まあそこらへんはビリでもいいだろう」

シルビアはそう呟くと、

「お前、これから私の奴隸になれ。わかつたな？」

「……は？」

「ちょっと待て！なんで俺が奴隸なんか……」

「「うるさい。ヒトは奴隸と先ほど言つただろう？ お前はかなり珍しいがお前を持つていれば私の宣伝にもなるしな」

「ざけんな！ 僕はお前なんかの奴隸になるつもりはない！」

そう返すとシルビアは人が変わった様に言つた。

「王族である私がうるさいといったのだ！ 黙らんか！ ……おいデニク！」

姫が叫ぶとわいつき出て行つたデニクが部屋に入つてきた。
もしかしたら氣を使って部屋の外で待つてくれたのかもしれない。

「こいつを牢に連れて行く！ こいつはこれから私の奴隸だ！」

「わかりました」

デニクは指をパチン！ と鳴らす。

すると部屋の入り口から兵士がぞろぞろと出てきた。

「うわつなんだよ。放せ！ 放せ…………！」

／＼＼＼＼

そして今見事につかまり手錠をかけられて護送中である。周りには数人の兵士とシルビアだけである。

「お前はこれから日の出とともに起床して私のために働け。いいな？」

前を歩いていたシルビアは振り返つてそう言った。

「……あい」

渡はそう言つしかなかつた。

これ以上反抗しては首が胴とお別れしなければならぬかもしない。

「今までの無礼を許して私直属の奴隸にしてやるのだ。嬉しく思え」

言つてからまた前を見て歩き出すシルビア。

今までの口調から一変して我が儘な王女に変わつた。

（俺、これからどうなるんだろ？なあ）

これからのことを見つめながら長い廊下の窓を見る。外では何かの訓練をしているか、手から火の玉を出したりしているのがいる。

(あれが魔法つて奴か……)

その様子をぼんやりと見ていた渡だつたが、窓の外で一際大きい火の玉を見付けた。

その玉は術者の手を離れると的に一直線に向かっていった。

はすだつた。

その火の玉は的に当たるかと思いきや、いきなり方向を変えてこちらに向かってきた。

(うわー！こっち来た！)

しかもその方向の先には……

(シルビアー！)

シルビアに向かって一直線に突き進む火の玉。

当のシルビアは上機嫌に鼻歌を刻みながらスキップをしている。

(くそー！この手錠が……)

そのとき渡の中でもぞ、と何かが動いた気がした。
次の瞬間、

「…………！」

渡は手錠を壊してシルビアに飛び掛った。

渡はシルビアを抱いたまま十数メートルを駆け抜けた。
シルビアは何が起こったかわからないようで眼をぱちくりさせていた。

そして後方で爆発が起こる。

壁はほぼ破壊され、渡を護送していた兵士たちも数メートル吹き飛ばされた。

熱風という衝撃波が廊下じゅうを襲い、壁にかけてあつた絵画や、いくらするのか分からぬ陶器が次々と破壊されていく。
シルビアは訳が分からぬつで、

「…………？　おいワタル。お、おま…………て、てじょ…………？」

何を言つてゐるのか分からなかつた。

「おいシルビア、きちんと周りを見て歩け」

シルビアはそういうわれて周りを見て歩く。
すると、

「なんだ！　敵襲か！？　おろせワタル！」

シルビアはそう叫んでじたばた暴れだした。

「ちがう。外で訓練していた奴らのが壁に直撃しただけだ」

渡が言うと、壁にあいていた穴から人が入ってきた。

「つー、誰か喰らつた奴は……つひ、姫えー？」

最後の方は声が裏返つていまいち聞き取れなかつたが、だいぶ混乱しているようだ。

「もももも、ももももひっわわわばいじゅせうにせうにあ……」

・・歯がひびくんだ。

だが当の本人はそんな事はどうでもいいようで、必死に弁明して

「わわわ私のふひがわがみこいのひよつなじとせじてしほがま
まみ……」

卷之二

「ひー！」

そいつは顔を真っ青にして土下座した。

「母ひ詠」だつてやん！――――――

脳が揺れるほど頭をがんがんと床にたたきつけている。しかしシルビアはそれを無視して、

「……ワタルよ。もしかしたらお前が私を助けてくれたのか?」

「ああそつだが？」

するとシルビアは身を引いて驚いた。

「んなつ、お前手錠はどうしたー？ 確かに手錠をしてあつただろ
うー」

「ぶつ壊した」

「はあー！？」

手錠は鉄製で普通の人には壊せないだろ。
しかし渡は普通ではない。

「お前に直撃コースだつたからな。ぶつ壊して助けたんだよ」

そういつて渡は壊れた手錠をシルビアに見せ付けた。
シルビアは何かを言おうとして、だが口をパクパクさせるだけで
何もいえなかつた。

喋る事を諦めたのか、シルビアは黙つて考え込んでしまつた。
その様子を渡は静かに見ていたのだが、シルビアの顔が難解な問
題に直面した顔から喜々とした満面の笑みに変わつていぐ。
その様子を見て渡はゾクリ、と背筋が震えた。

「お前は手錠を壊して私を助けたのだな？」

「……ああ

渡がそう答えるとシルビアは心の底から楽しそうに笑つていつた。

「よし！お前は奴隸はなし！かわりに私の手駒として働け！」

手駒？

「確かに四番隊の副隊長席が空いていたな……よし、ワタルを四番隊の副隊長に任命する！」

四糸窓の図書館

「なんだ？」副隊長つて

すると廊下の角から騒ぎを聞きつけたのか、ミーシャがすこ飛んできた。

「姫ええええ！」「無事でござりますかあああーーー！」

この世のものとは思えない形相でシバヒアの下は直行しき上

「姫！ ご無事でござりますか！ だからあんな野蛮人は打ち首にしたほうが良いと……」

ちょいまで、今回俺は助けたんだぞ？

「みみみニーシヤおお落ち着け。首が、首が、……」

「うはー、申し訳ござりませんー。」

ミーシャは姫をおろした。

「姫！ 何があつたので、」ぞいますか！？」

シルビアはケホケホとむせながら言つた。

「……コホッ、いや、いきなり壁が爆発してな、それをワタルが助けてくれた、というわけだ」

するとミーシャが信じられないものをめにしたような感じで渡を見た。

「……………？」姫を……………？」ありえん！」

「ありえるわアホ！なんで俺が見殺しにせにやあならんのだ！」

「アホとはなんだ！ アホとは！
錠はしていなかつたのですか？」
……それならば姫、こいつに手

シリビアはミーシャに聞かれると自信満々に答えた。

「それがな、鉄の手錠をしていたのにも拘らずそれを破壊して私を助けたのだ！」

「んなつ、こんな奴に鉄の手錠を壊せるわけがないでしょう！ それが出来るのは獣人か半竜人ぐらいです！ 嘘も大概にしないと…

—
—
—
—

「本當だ！ だつたらこれを見てみろ！」

シルビアはそういうて渡の持つていた手錠をひったくつた。

「これがワタルにかけていた手錠だ。見事に壊れているだろ？？」

それをみたミーシャはむむ、と唸つた。

「しかも私と数メートル離れていたにも拘らずそれを一瞬で縮めて私を助けたのだ！ そんな人材を私が見逃すわけがないだろ？？」

そこで言いたい事がわかつたのかミーシャは恐る恐る聞いた。

「あの、姫様？ それはまさか……」

「ああ、ワタルを四番隊の副隊長にする。ちょうど席も空いてたしな」

それを聞いたミーシャはさらり取り乱して、

「ひつヒトを奴隸以外になど、しかも副隊長！？ たしかに四番隊の副隊長席は空いていますが、こんなやつを副隊長などに任命しうものなら周りが黙つていませんよ！ それにエリスが可哀想です！ こんな野蛮人となんて！」

渡はミーシャの酷い言い様にショックを受けた。

いくらなんでもそこまで野蛮じやないよ？

「それにこんな奴が『称号』を持つていてるわけ無いじゃないですか

！」

「称号？」

「称号は私がつけてやる！ そしてワタルはエリスを襲えるほど度胸があるとは思えん！ 周りは私が無理やり抑える！」

二人の言い合いに渡は少し傷つきながらも必死に思い出そうとしていた。

（称号……称号、なんか神が言つていていた氣もする……）

一人がギヤー・ギヤーと騒いでいる中、渡が呟いた。

「……称号」

渡の呟きを聞いて一人は争いをやめて渡を見た。

「なんだワタル。お前称号持つてたのか？」

「いや、こんな奴が持つている訳ないです！ ここでなんとか奴隸を脱出したいから良い感じの称号を勝手に考えているだけです！」

「馬鹿を言つたミーシャ！ そんなわけがないだろ！」

再び言い争いに入るつとする一人。

その前に渡は一人に呼びかけた。

「あつた……気がする……」

その言葉を聞いてシルビアの顔がぱあっと晴れた。

「ああ！ 持っていたのか！ で、なんだ？ 何と云つて称号なのだ？」

「やつぱり即興で考えただけです！ 信じませんからねー。」

渡は必死に神の言葉を思い出そうとする。

（『ハナハナ、言に忘れていたがお前の称号は……』）

「神の使い……？」

それを聞いて二人はぽかんとし、一人の頭上に？マークが浮かぶのが見えるようだ。

渡もよく覚えていないためまた考え込んでしまつ。

一番早く覚醒したのはミーシャだった。

「つ貴様！ ぱっと思ついた称号が『神の使い』だと！ 貴様なんかが神を語るなー！」

そういつて腰の剣を抜き、渡の首に切つ先を向けた。

本氣で切り落とすつもりだ、と田で語つてミーシャに氣迫で押されて一步後ずさる。

そんなミーシャをシルビアがなだめた。

「ま、まあミーシャ。ルミニに任せねば一発だつて、だから、な

？ とりあえず剣をしまえ」

シルビアに言われて渋々剣を収めるミーシャ。

だがまだ認めていないようだ、

「な、りば早ヘル!!」に鑑定させましょ、つい、……やうの……。」

「きなり振られて肩を振るわせる、まだ土下座をしていた兵士。

「なんでしょう、？」

「至急ルミニを呼んで来い！」

「わかりましたあーー！」

そういって走り去り去りとする兵士。それをシルビアが呼び止めた。

「いや鑑定は私の私室で行つ。」『では少し人目が多くなる』

三人は周りを見回した。

確かに騒ぎを聞きつけた兵士や使用人がたくさんいる。

土下座兵士はシルビアの言葉を聞くと、限界を超えた速さで走つていった。

「……わ、わ、一応聞くがワタル。お前の言葉に嘘は無いな？」

「……たぶん。そんな感じのことを言われた気がする」

すると笑顔になるシルビア。

「よし！ 私はお前を信じるぞ。」

もうこいつで歩こう。

「…………おこ。ビリーヴんだ？」

「ビリーヴて私の私室だ。わざわざ言葉、覚えていないのか？」

わういえばそんな事も言つてたつて、と渡はシルビアについてい
うつとある。

すると後ろからものすごい殺氣を感じた気がした。

振り返つたら負け。

そう思つた。

「おこ貴様。謝るなら今だぞ？ 今ならまだ許してただの奴隸にし
てやる。鑑定結果が出てから謝つても私は許さん……必ずお前を打
ち首にしてやるからな……」

底無しの殺氣が渡を襲つ。
体が一瞬硬直した。

～覚醒～（後書き）

感想お待ちしております。なんでもここのでどんどんください！

～長～ | 口～ (前書き)

書いてこの間に今どうなのが分からなくなつたよつな気がします

シルビアの私室に着くとそこには年老いた老人がいた。

「来ましたな。その後ろのが先ほど姫様が召喚されたヒトですな？」

頭は白髪で、顔中皺くちゃで、緑のローブを纏つたいかにもおじいちゃんの方だ。

「ああそつだ。で、ルミー、ここつを副隊長にしたいからこのつの称号を調べてくれ

シルビアがそつこつヒルミーはまほつまほと笑つた。

「まあかヒトを騎士団の中に入れよつとする方がいるとは……いやはや命知らずですな。まあ私はそんな姫様が好きですぞ」

ルミーはそつこつロープの中からなにやら器械を取り出した。イメージだと血圧を測るときに使う血圧計みたいな機器だ。

「ルミー、お前が気になるのも分かるがそれは私の部屋で、だ」

シルビアがそつこつヒルミーはまたほつまほと笑つて、

「いやいや、申し訳ござりませぬ。姫がそんなに騎士にしたいのであればそれ相応の何かを持つていいのじょつ。気になつて仕方がありませぬな」

ルミーは血圧計みたいなのをローブの裾にしまつ。それを見たシルビアは傍のドアを開けた。

中はいかにも姫様といった感じの部屋だった。

部屋の中はピンクを中心とした部屋で、田の前に見えるベッドには天蓋なんかがついている。

シルビアは部屋の真ん中にあつた小さなテーブルの小さな椅子にちょこんと座った。

「さて、早くしてくれ」

シルビアは先ほどまで抑えていたわくわくを一気に開放して満面の笑みでそういった。

「わかつてあります。……では、えーと」

「柳瀬渡です。ワタルのほづが名前です」

それを聞いたルミーは、

「面白い名前ですね。ファーストネームが名前でない」と

「そうだろう? それに面白い生地の服を着ているし、胸のは何かの勲章だらうしな」

たぶんシルビアの言つているのはジャージのことだらう。渡は赤く、脇に黒い線が入つたジャージを着ている。勲章とは胸の所にある母校の校章の事だらう。

「いや、これは勲章じゃなくて……」

「そんな謙遜はいらん。それよりも早く～

シルビアは渡とルミニーを急かす。

「わかりました。ではこちへ……」

ルミニーはそういってテーブルの反対側に座る。

渡もルミニーに向かい合って座った。

ミーシャは渡の後ろで腰の剣に手を当てて渡を見下りしている。渡の背中にびしひと視線を向けてくるが渡はあえて無視した。

「さて始めますかな」

そういってルミニーは血圧計をテーブルにのせた。

「これは魔道器。これで生物の魔力、生命力等の潜在能力や、称号の判別も行つことが出来る優れものです」

ルミニーは自慢げに魔道器とやらをぽんぽんたたいた。

「ではこの穴に腕を入れなされ」

渡は魔道器の穴に腕を入れた。まんま血圧計だ。

渡の腕が入ると魔道器の穴がひとりでに締まる。

だが血圧計とは違つてそんなに締まる事はなかつた。

渡の一の腕にぴつたりとくつつくと、ふいにいんと小さな起動音が聞こえる。

しばらくその状態が続く。

ルミニーもシルビアもミーシャもその魔道器にかじりつくように見入つていたが、その起動音が消えると全員ふはあ～、氣を抜いた。

「で、ルミー！ 結果はどうだーー？」

ルミーは魔道器についた水晶をじっと見つめていたが、その結果に眉をひそめた。

「これは……どうしたことでしょう。この者に魔力が存在しませぬ。生命力はとても高にようですが……故障ですかな」

その言葉を聞いて渡が反応する。

確かに神の説明のときにそんな事を言つていたはずだ。

「いや、俺つて体は丈夫なんですけど、その、魔法といつものが全く使えないから……」

その言葉にその場にいた全員が疑問を浮かべた。

「魔法が使えないって……そんな奴聞いた事がないぞ

ミーシャはそうつぶやいたがシルビアにはそれよりも優先する事があるらしい。

「いや、そんなことはどうでもいい！ それよりも称号だ！ 持つてこるのか！」

シルビアはその後で、まあもつていなくとも私がつけるがな、とシルビア自身も半信半疑のようだ。

「まあまあちなされ、姫。そんなに急がなくとも称号は逃げませぬぞ

ルミーはやれやれといった様子で水晶に視線を戻す。ルミーも信じていないようだ。

ルミーはのんびりとした様子で水晶を眺めていたが、

「つぬ……！」

椅子から滑り落ちた。

いきなりの事に驚いて、シルビアは手を丸くしている。

「ビリビリしたルミー！」

ルミーは苦しそうにもがいている。

「ルミーの腰が……いや、それよりも……ぐふつ！」

ルミーはやっとの事で椅子に座りなおすと深呼吸した。

「ルミー！ビリしたのだ！」

ルミーは一つ咳をしてシルビアを手で制した。

「「」ほつ……姫様、あなたはとんでもない者を召喚なされましたな

……」

ルミーの言葉にシルビアは静かになる。

「「」の者……いえ、「」のお方は『神の使い』です……」

ルミーはシルビアをまっすぐ見つめていった。

「……は？」

シルビアは思考がついていけないようだ。

後ろで控えていたミーシャも信じられないようでルミーに詰め寄つた。

「こいつこんな輩が神の使い！？ そんなわけがないでしょう！ 何かの間違いです！ その魔道器は壊れています！！」

するとルミーはミーシャを睨み付けた。

「言葉を控えなされミーシャ殿！ 『神の使い』様に向かつて何たる無礼！ 確かにヒトは隸族であります。がヒトは本来『原初の種』。今ある種族はエルフやヴァンパイア等例外は除き、ほとんどヒトから生まれ、本当ならば我らはヒトを敬わなければならぬ存在。』神の使い』様がヒトの形をしていてもなんら問題も無いはずです。しかもこの方の格好。黒髪に黒目。さらに格好も我らとは違います。『原書の種』であるけれど普通のヒトとは違う……。この方が神の使いである証明にこれ以上のものがありますか…？」

ルミーのあまりの剣幕にミーシャは思わず身を引く。

ルミーは息を切らせて言い終わると、シルビアの肩を掴んだ。

「姫！ このお方を四番隊の副隊長なんぞに留めてはなりません！ 将軍……いや王の傍に置かれるべきですぞ…」

ルミーの言つてこる事はよく分からなかつたが、渡にはとにかく

あまりよくない方向に進んでいる事はわかつた。

あまり位を上げられては面倒くさいので渡は辞退する事にする。

「いっいや、そんな王様の傍だなんて、面倒……いや、よく思われない方も多いでしょう、そんなに高くされなくともー。」

渡のその言葉を聞くトル///はふむ、と考え込んでしまった。

「確かにザファー・レス家の連中がでしゃばっつきですが……あなた様が副隊長に落ち着くなど……」

ルミーはまだ不満があるらしく。

ルミーがうーん、うーん、と悩んでいる所でシルビアがよつやく口を開いた。

「ワタルは、どうしたい？」

「え？」

突然の事だったので反応できなかつた。

「ワタルはどうしたい？ 偉くなりたいか？」

シルビアの顔にはどこか寂しげな色が見えている。

渡は少しだけ悩んで、

「俺は別に偉くなりたいだなんて思っていないよ」

実際の所は面倒くさがったからなのだが。

その答えを聞くとシリビアはぱあっと顔を輝かせて、

「おお、やせつやつかー。」

席を立つて喜んでいる。

そんなに喜ぶ事なのかな、と渡が心の中で苦笑していたその時だ。

「納得がこきませんーー。」

ミーシャが渡の耳元で叫んだ。

渡の耳がきんきんとする。

ミーシャはわなわなと震え、拳を握る。俯いているせいで顔は良く見えない。

それに反論したのはルミー。

「ミーシャ殿まだ言いますか！　このお方は神の使い！　何故認めよつとせぬのですかー！」

その問いかにはミーシャは答えず、ただ震えていただけだったがしばらくして口を開いた。

「ならば……」

「ん？」

「ならば決闘を！　神の使いならば一番隊隊長であるこの私を倒す

など造作もなことじょ「うーーー」

渡は頭を抱える。

面倒くさい事をしてくれたな、と。

しかし他の一人は案外乗り気のようだ、

「それでワタル様が勝てばよろしくのですね? ならば簡単でしょ
う」

「ワタル! お前は勝てるよなー?」

お前ら少しばは身内を応援しろよ。

実際は渡よりもミーシャの方が身内なのだろうが。

そんな渡の心の声も届かず話はどんどん進んでいく。

(俺がこんな人に勝てるわけ無いじゃん……魔法も使えないしな)

渡はすでに諦めモードである。

「やうとなれば善は急げ。ルミー! ただちに他のものたちを闘技場に集めよ!」

「かし」しました。……ほつほつほ、長生きするもじやのう。
楽しみじゃわい……」

おこ、じじい最後の闘いえたぞ……。

渡は部屋から出て行くとするルミーを睨み付ける。

だが当のルミーはその視線に気が付かないまま部屋を出て行った。しまった。

取り残されたのは眼を輝かせるシルビアと殺る気まんまんのミーシャ、意氣消沈の渡である。

ミーシャは身を翻すと、

「ロロシアムで会おう。……まさか逃げるなんてしないよな？」

挑発を捨て台詞代わりに残し、部屋から出て行った。

「さてワタル、これからミーシャと決闘だ。時間は大体3時間後ぐらいだろ？ それまでにやることはたくさんある」

やる気が失せている渡をよそに一人で勝手に話を進めるシルビア。

「まずは武器選びだな。流石に丸腰で挑んでは死んでしまう。そうと決まれば、ほら行くぞ！」

眼が輝きに満ちているシルビアは、目が死にかけている渡の手を引っ張つて部屋を出て行く。

渡は思ひ。

丸腰だろ？ がそつでなかろ？ がビッち道死ぬのではないか、と。

「これは武器庫、らしい。

目の前には見張りの兵士が一人。

シルビアが近づくと、番の兵士たちは、こちらに気が付いたようだ、持っていた槍を縦にかまえる。

「姫様、話は聞いております。後ろの方が神の使いであるヤナセワタル様ですね？」

どんだけ話が広がるのが早いんだ、とため息をつく。ため息が口癖になってしまいしそうだ。

「ああ、聞いているなら話が早い。あけてくれ

シルビアがいつと兵士は武器庫の大きな扉を開ける。ギイイ、と重そうな音を立てて武器庫の扉を開けた。

「では行くぞワタル」

シルビアはつかつかと中に入つていつてしまつ。渡もシルビアを追つて中に入つていた。

武器庫の中は暗く、だが風通しはよくじめじめとはしていない。

「よし、この中から好きなのを選べ」

そういうわれて渡は武器庫の中を見渡してみる。
中には剣、盾、槍、弓、メイスや鎧などがある。
が、渡にはどれを選べば良いのか分からなかつた。

とりあえず一つ一つ手にとつて見てみる。

どれもこれもきちんと手入れされていて、刃を覗き込むと自分の
顔が見えるくらいだ。

どれにしようかとなやんでいるとシルビアが声をかけてきた。

「おいやタル！ これなんかどうだ？ うちの国の新兵器だぞ！ 名
前はまだ決まっておらんがな」

そういうわれて振り返つてみたのは、

「薙刀つてここにもあつたのか」

そう、薙刀である。

槍のよう長い柄の上に片刃の剣が取り付けられてゐる。

実は渡の兄が薙刀部に入つていて、小さい頃によく練習や大会を見
に行つていたのだ。
だから少しだが型は分かる。

渡は無言でシルビアの持つていた薙刀を受け取るとシルビアから
少し距離を取つた。

意外に重量を感じることは無く、ひょいと持ち上げる。

そしてその場で見よう見まねの型を試してみた。
ブンシブンシと重量感のある音が聞こえる。

本当はもつと重いのだろうが神の力によつて強化された渡にはそんなに苦にはならない。

素振りをしている渡を見たシルビアは驚きの声を上げる。

「おい、お前その武器知つているのか？ それは我が國の新兵器なんだぞ？」

「俺の国にもこんなやつがあつてな、兄が使つていたんだ。今のは兄のを真似しただけ」

「まつ……我が國の新兵器が神の国には既にあつたのか……」

神の使い＝神の国とされているが渡は無視した。

「よしワタル、お前の武器はそれだ！ がんばれよ」

渡は勝手に決め付けられて反抗しようとしたが他の武器よつもこれのほうがまだ知つてこるから、とやつぱり薙刀にすることにした。

「それにしても……それは神の国ではナギナタといつのだな……ならば我が國でもその名前にしよう！」

「良いのか勝手に決めて？」

「構わん！ 名前がいつまでもないよりはあつたほうがいいだろう？ それに神の国との同じ名前だ。兵士の士氣も上がるだろうしな

やうが、と渡は適当に流して武器庫を出て行く。
やることが無いのでとりあえず試合開始まで練習する事にした。

「おこワタルー、リードで振るな、危ないだろ？が！」

~~~~~

やしてこじらせロシアム。

田の前には完全装備のミーシャ。

周囲には席がちらちら空くほどどの観客、もとい暇な兵士。  
そして一際高い席にはシルビアが座っている。

「よく逃げ出さずには来たものだ……」

「こや、このははで逃げ出せたらそれはそれで勇者だよ……」

「逃げ出しが勇者だと……お前それでも騎士を田指す存在か……」

いや、そういう意味ではなくてですね。

渡はなんとか言おうとしたが無意味なのを知っているのでやつぱりやめる事にした。

「ルミーー。 やつやと始めたー。」

審判役のルミーーをミーシャは懲かす。ルミーーもやつやと始めたによつて、

「わかりました。 双方よろしいか！？」

ルミーーは渡とミーシャに眼を向ける。ミーシャが頷いて応えるとルミーーも頷き返した。

「では、始めいっ！」

その瞬間観客席から大きな歓声が起きた。

「我が名は『戦場の詠い手』ミーシャ・ランショルフー・ゆくぞーー。」  
ミーシャが名乗りを上げると爆発的な勢いで突つ込んできた。

渡は、

（なんか名乗るのって結構恥ずかしくないのか？）

こんな事を考えていた。

命がかかっているのにのんきなものだ、と渡は自身で突つ込んだ。

「余所見をするなー。」

もう一歩してこぬつかルミーシャがあと少しのところまで迫つていた。

ミーシャは後一步の所を無理矢理蹴つて距離をつめる。渡はバックステップでミーシャの横薙ぎをかわした。

そこからミーシャはどんどんと連續で斬つていぐ。だが渡は間一髪の所で全てかわしていた。

それを遠くで見ていたシルビアは、

(ミーシャが優勢だな……だがミーシャは冷静さを失っている。やここつまく付け込めば……)

客観的な判断を下した。

興奮すると融通が利かなくなるのにこんな所だけ優秀である。そんなシルビアから劣勢に思われていた渡も結構疲れてきた。

(ここつまにかわ、すのはつつかれるなあもつー…)

時にはバックステップ、時には薙刀で弾きながらミーシャの斬撃をかわしていく。

しかしそれにも限界はあり、

ふつとミーシャの放つた鋭い突きが渡の頬を掠めた。

「どうした? 動きが鈍っているぞ?」

ミーシャがさりに挑発した。

「ここのやうひー」

渡は無理矢理ミーシャを押し返す。

体が火照っているからか、興奮しているからなのか、体の中がぞわぞわする。

「これで終わりだ！」

ミーラは押し返した分の距離を一気につめて向かってきた。剣は既に上段に構えており、体重の全てをかけていることが分かる。

（こんなところ死にたくない……）

そのとき渡のからだの中が大きく動いた。もぞり、と何かが「うごめき、力が全身にいきわたり、時間が遅く感じる。

渡は無我夢中で動いた。

前へと。

薙刀の峰の部分でミーラを切り払い、そのまま十数メートル駆け抜ける。

後ろでミーラが倒れる音がした。

誰にも何が起こったかわからない。

ただ、渡が瞬間移動したようにしか見えなかつたださう。だがしかし、これで渡が『神の使い』である事は証明された。

とたんに響く歓声。

一番状況を理解していなかつたのは渡であろう。

渡はただ呆然としていた。

しばらくほーっとしていると、後ろでもぞり、と音がした。  
ミーシャが起きたのか、と後ろを振り返つて臨戦態勢に入つたが  
ミーシャの殺氣は消えていた。

「いや、強いな」

ミーシャの起きてからの第一声はそれだった。

「ありがとうございました」

ミーシャは頭を下げる。

つられて渡るも頭を下げた。

その様子にミーシャは少し驚いたようだったが、しかし何もいわ  
ずに「ロシアムから出て行つた。

ひして一人の決闘は幕を閉じた。

「よべやつた渡!」

こはロシアムの控え室。

部屋には渡とシルビアの他こみミーシャだけである。

「最後の一撃は全く見えませんでした」

と、自分を全否定していたミーシャがほめてくれると何だかむずがゆい。

渡が頭をかいて照れているとシルビアがいった。

「これでお前ははれて四番隊の副隊長だ！ よかつたな！」

……おおう、すっかり忘れてた。

まあ王様の傍よりは全然楽そつだし良いかな……？

「まあお前も四番隊の副隊長になつたわけだから四番隊の奴らに挨拶でもしてきたらどうだ？」

「それもやうだな……その、隊長つてどんな人？」

シルビアも失念していたようで、思い出したようと言つた。

「お前のとこの隊長はエリス。まあ詳しく述べ本人に聞け。四番隊の兵舎までは私が送つてやるから」

シルビアはわざと控え室を出ようとする。

渡も追いかけようとしたがミーシャに後ろから声をかけられた。

「その、ワタル……さん？」

「いや、気持ち悪いから渡でいいよ

「ワタル、その……すまなかつた」

突然の行動に動搖する渡。

「え！？ なんのことですか？」

渡がとぼかると、リーダーは渡に詰め寄つた。

「とほけるな！今までしてきた数々の無礼、お前が本当に神の使いならばこの場で私を切ってくれても構わないぞ？」

騎士道精神凄いなあ、と感心する渡。

「いや、別に気にしてないよ。ミーシャさんもいきなり来た俺を信じてくれるのは当たり前の事だと思つした」

その言葉を聞くと、一ノ瀬は安心したようにいった。

「……お前は心が広いな。ありがとう」

ミーシャはもう一度頭を下げる。

そんなんいいですよ。…………ではこれで

そこには、これまで頭を下げるやうな事にした。

ミーシャがいい奴というのは本当なのかも、と思つ渡だつた。

「さあ、ローリーが四番隊の兵舎だ」

渡の田の前にはレンガを積み上げて出来た建物があった。それは大体一戸建ての家を四つぐらいつなげたぐらいの大きさだった。

「四番隊は人数が少ない部隊だからな。兵舎も訓練場も小さいんだ」

渡にはこれで小さいのか？と思えたが屋敷を見た時点で大きさについては問わないことにする。

兵舎の隣に運動場らしきものが併設されていて十数人の兵士の姿が見えた。

恐らく訓練場とはあれのことだな。

「さて、行くぞ」

シルビアはそのままつかつかと歩いていってしまう。

渡もシルビアを追いかけようとしたが何故か立ち止まつたシルビアにぶつかりそうになり、つんのめつて転んでしまつた。

「つ、あぶねーだろ！」

「ああ、すまん」

軽く詫びを入れるシルビアだったが反省している様子はない。その様子に軽くイラッときたがここは抑えておく。

「どうしたんだ？」

渡が立ち上がりながら聞くとシルビアは訓練場の方を指差した。渡が指の先を見てみると、誰かがこちらに向かって走ってきていた。

黙つてみているとその人物は大体200メートルの距離を10秒足らずで縮めて渡たちの目の前に来てしまった。その人物は膝に手をついて肩で息を切らせていたがじばらくすると立ち直つて言つた。

「どうでしたか！？」

渡には意味不明の言葉だったがその問ひにはシルビアが答える。

「ん～、一回位は唱えられるな・・・もう少し速くなつた方が良いぞ」

シルビアの言葉を聞くとその人物は肩を落とした。

渡は会話に取り残されていたがシルビアが渡を会話に混ぜた。

「紹介する。こいつが新しくお前の隊の副隊長になつたヤナセワタルだ」

「柳瀬渡です。渡のほうが名前」

渡が頭を下げるとき、相手も律儀に頭を下げてきた。

「私は四番隊のエリス・フインカートといいます！ 種族は竜人です。・・・ワタルさんの噂は聞いていますよ！ 一番隊隊長のミーシャさんを一撃でノックアウトとか！ さすが『神の使い』ですね！」

エリスの髪は銀色の髪を肩で揃えていて、前髪は目にかかるくらい。額には大きめのゴーグルを掛けている。

「私は試合は見ていなかつたんですが、私の部下が見ていたらしくて、それはもう目に見えないほどの速さだったといつていましたよ！」

「いや、そのときは必死だつたおれ自身は覚えてないんですよ」

渡は余りにも褒められたので（女子といつのもあるが）照れてしまつ。

シリビアはそんな一人を眺めていった。

「私はそろそろ行くぞ。もう夕食の時間だ」

「はいわかりました！」

シリビアは身を翻してすたすたと歩いていつてしまつた。

渡は知り合いがいきなりいなくなつてしまつたので少し気まずく感じたが相手にとつてはそうでもないようだ。

「さてワタルさん。兵舎を案内しますよ。……それと私には敬語使わなくても良いですよ。私に敬語の人なんて私の隊にはいませんから」

「お、おつ……わかった

渡の返事に満足すると、エリスは上機嫌で兵舎に歩き出した。

＼＼＼＼

「兵舎の中は大体こんなもんですね」

「ここは兵舎の一階の広間。  
広間といつても長ソファと長テーブルが二十組づつに置かれているだけなので休憩所になつてているらしい。」

エリスの兵舎の案内が始まって一時間位。  
本当ならばもっと早く終わっていてもいいのだが兵舎で誰かに遭うたびに声をかけられるため余計な時間を使ってしまったのだ。

「あとはワタルさんの部屋だけですが……そろそろ夕食の時間なので食堂に行きましょうか」

「ん、わかった」

渡は覚えたばかりの廊下をエリスと歩く。

広間から食堂はそんなに遠くはない。

広間からのびる一本の長い廊下の突き当たりだ。

食堂に入ると既に50人程の兵士でじつた返していた。

近くにいた兵士が入ってきた一人に気がついた。

「お、尊の神の使い様がご登場だ！……お嬢ちゃん、デートはもう終わりかい？」

「もう、ガルザックさんやめてくださいよ！」

その兵士はガルザックといふらしい。

髪は所々白髪が混じつており見た目からも初老に届くかどうかといった所だが彼から見えるオーラはまだまだ若い。

ガルザックはがつはつはと笑い飛ばすと渡を見た。

「ワタルつていったか。これからよろしく頼みますよ『神の使い様』

ガルザックにとつてはからかっているつもりらしい。

渡はぺこりと頭を下げる。

ガルザックとはそこで別れて一人はカウンターに向かつた。

そこには若く、髪を短く刈った白い服を着た若者が立っていた。

「いらっしゃいませエリスさん！ 珍しいですね、今日はあなたが最後ですよ」

若者は器にスープ、皿にサラダを盛り付ける。それらをお盆に載

せて、それから平べったいパンのようなものを載せた。  
お盆をエリスに渡すと若者は嬉しそうに笑顔になる。

「エリスさん、僕やつとここの人数分ちょうど料理を作る事ができたんですよ！もう鍋の中は空っぽ！しかし皆さんにはしつかりと食べてもらっている……これほど嬉しい事はありません！！」

若者はそこまで言つたとこで渡のことに気がついたようだ。  
しかし渡も若者が言つた事を総合して一つの真実にたどり着く。

「あなたは……確かにワタルさんですね！これから空席だった四番隊の副隊……」

若者はそこまで言つて笑顔のまま固まつた。  
そこでタイミングよく渡の腹がなる。  
それを聞いてから若者の顔がどんどんと青くなつていった。  
それを見て渡は確信する。

（……俺の分は、無いな）

見かねたエリスが声をかけた。

「……ワタルさん、私の半分食べます？」

その瞬間若者は光の速さでカウンターを飛び越えて渡の目の前に移動すると土下座した。

「申し訳ございません！！ 噂には聞いていたのですが本当の事と

は思わず……そこまで頭が回つませんでしたー 本当に申し訳ござ  
いました！――」

頭を「ノンノン」と呂めつけながら若者が土下座する。  
するとまた渡の腹がなる。

確かに朝飯を食べたが皿は食べてないので腹がなるのは当然の事  
である。

渡の腹の音を聞いた若者は頭を床に呂めつけるのをやめた。  
渡がびびったのかな、と思つてみると

「もう一回作り直してきまーすー！――！」

若者がまたカウンターを飛び越えて厨房に向かおうとする。  
だが今度はカウンターに足を引っ掛け頭から落ちてしまった。  
そのまま動かなくなる若者。

「……後で言つておきまくからとりあえず食べましょーか」

Hリスはお盆を渡に任せると皿を取りに厨房の中へ入つていった。

「わざわざはすみませんでした……れていなかつたのに……」

「いや、少しでも食べられただけで十分だよ。それよりもH里斯ちゃん、半分貰つちゃつたけどよかつたの?」

「リリは」「階廊下。

兵士部屋は一階、隊長・副隊長の個室、事務室、会議室等は一階になつてゐる。

「いえ、いつも残してしまつてるので構いませんよ」

「やつ? なういこなだ」

誰もいない廊下を一人は並んで歩く。二人の個室は食堂から反対の位置にあるので歩いて移動するには一苦労する距離だ。

「明日からはしつかり作らせますので……」

「いこよせんな。そんなに気にしてないし」

H里斯はさつきからこの調子だ。

渡としては本当にそれほど気にしてこないから本当にいいのだが。

「うう……やうこつていただるとありがたいです……」

H里斯は自分が失敗したみたいにじょんぼつしてくる。心の優しい子なのだろう。

H里斯は渡よりも頭ひとつ分くらい小さくので渡がちよつと見下すやすい。

その肩をぽつした頭を見下ろして、ヒリスは立ち止まった。

「ワタルさんの個室は？」

「一つの間にか個室についていたりして。

「私はワタルさんの向かいの部屋ですので何かあつたら来てください」

渡は女子の部屋に行こうとしたが、なんらかたがとりあえず頷いておく。

「では明日からワタルさんも訓練に合流しますので心の準備をしておいてくださいね」

「うん、わかった」

「朝食の時間になつたら呼びますので……ではおやすみなさい」

ヒリスはページをお辞儀すると渡の部屋の向かいの部屋の扉を開けて入つていった。

渡も個室に入る事にする。

そこには机、棚、ベッドなど必要な物しか置かれていなかつた。一人になつて安心したせいか、につきに睡魔が襲つてくる。

（明日も早いから少し、寝るか）

ベッドに潜りこむ渡。

（もういえばこの世界に来てからまだ一日もたつてないんだなあ……）

…)

自分の順応力にちょっとため息が出る度。  
少しの空腹を感じながらもだんだんと意識が遠くなつていった。

## ～長～ ～田～（後書き）

ちよつとむづやつすきかなあ～と書いてみてから思いました

とりあえず何故薙刀？つてくるかもしだれませんがこれは古本屋で三国志を立ち呼んだ後に駅で薙刀部の方らしき人を見たからです！

これはやるしかねえ、と思つたのですが自分でもおかしいかなと思いました。

やひくんは許して下さい・・・

え？許さない？・・・えつと、すみませんでした。

これから精進いたします・・・

感想お待ちしております^ ^

～初陣～（前書き）

楽しんでいただければ幸いです

## 「初陣」

「ワタルさん、遠征ですよ」

「遠征？」

「はい、なんだか魔獣討伐の命令だぞ！」

「……ふーん」

渡がこの世界にきて、また四番隊に入隊してから1週間がたつた。その間に渡は隊員たちとも仲良くなつたし訓練もこなしてきた。だがその訓練で気がついたことがあった。

確かに元の世界よりは丈夫になつたと思う。

しかしミーシャとの決闘の時のような急加速みたいなものが出来ないのだ。

だからこの一週間はずつと薙刀の訓練や隊員と組み手しかしていない。

そう悩んでいる所にエリスが来た。

「何かもうと反応はないんですか？ワタルさんの初陣ですよ」

「別に…… そうでもないかな」

「ここは一階の会議室。

ここにいるのはエリスと渡だけだから別に会議室でなくてもいいのだが。

「出発は明日です。心の準備をしていてくださいね」

「つー 明日ー?」

渡には初陣よりも明日という事実の方が驚きだった。

「なんでそんないきなり……」

「いつもこんな感じですよ? なんだか昨日屋敷宛に手紙が届いたそうで。他の部隊は再編成とか隊長が不在とかでまともに動ける部隊がウチしかないんですよ。姫様もワタルの初陣にぴったりだつて入つてました」

……あの小娘が。

渡が黒いオーラを発していると、エリスは大きな紙を何枚か取り出した。

「このちの紙が現地付近の地図。こっちの資料は予想される魔獣の一覧と情報。この紙が部隊編成用です」

「部隊編成? 大体把握してるし、いるないんじゃない?」

渡がそういうとエリスは渡に教えるようになつた。

「確かに把握してはいますが……五十人強の人数をそのまま突っ込ませるわけには行きませんでしょ？隊をさらにいくつに分けて行動するんです。それぞれの配置をこれに書くわけです」

エリスは部隊編成の紙を渡とエリスの間に置く。

「それぞれの個性や能力、さらには互いの相性などいろいろな事を考えて編成しなきやいけないんです。そこが隊長と副隊長の大変なところですねえ」

ワタルさんが来たから少し楽になりますけど、とエリスははにかんだ。

「ま、うちの部隊はみんな仲いいですし相性やら何やらは特に考えなくてもいいんですよ。ワタルさんにもそのうち任せるとかもどちら早めに隊員の特徴を掴んで置いてくださいね？」

そんなことできんのかな、と渡は不安になつたが一応頷いておく。エリスは渡に部隊編成の紙を一度見せると自分の前に戻してさらさらと何かを書いていく。

恐らくそれが部隊編成なのだろう。

エリスは何かつぶやきながらその紙に集中してしまつ。

一人ぽつんと残された渡は暇なので地図と魔獣情報の紙を見てみる。

地図の方は現代とは違つて記号やらなにやらは無いが結構簡略化されているので見やすかった。

見た所森の中に一本の道とそれに沿つて川があり、その奥に村があるらしい。

道は比較的まっすぐで森の真ん中を道が川とともに両断している。

次に魔獣の情報が書いてある紙を見てみた。

すると、

「エリス、文字が読めないんだけど……」

エリスは机の上の紙から顔を上げると首をかしげた。

「文字……ですか？ ワタルさん文字読めないんですね？」

「いや、読めないっていつかこの文字を知らないこといつか……」

エリスはますます首を傾げると、

「「」の文字を知らないって、神の使い様なら文字くらい知つていても……」

「俺この国の人間じゃないし……てかこの世界ですらないしな」

それを聞くとエリスは納得したようだつた。

「そういうことですか。……ワタルさんの世界や国つてどうですか？ ゼひ教えて欲しいんですけど」

エリスは目を輝かせる。案外好奇心旺盛なのかもしれない。

(見た目もそんなに歳とつてなさそうだし、子供っぽいってのがしつくつくるけどな)

渡はほつりと心の中でつぶやいた。

「まあ話してもいいけど、そつちははどうなの？　俺の話は絶対長くなるけど」

「ああ、それもそうでした……こっち先に終わらせて、それからワタルさんに教えてから……じゃ遅いですね。またいつか教えてください」

エリスは明らかにしょんぼりしている。

見ていて面白いぐらいに。

渡はそんなエリスを見ながらエリスの横の席に移動する。

「じゃあ先に部隊の説明をしますね。ワタルさんはまだ初めてなので私の隊に入つてもらいます」

エリスは渡に紙を見せながらいった。

「部隊は三つに分けます。真ん中が私、脇に二つの隊です。戦闘要員は50人。後の何人かは回復専門なので後ろに控えていてもらいます」

エリスはそこらへんにあつたペンやラインクやらを使いながら隊の陣形を説明していく。

「各部隊前後に分かれて戦います。ただの殲滅戦だつたら全員突撃してもいいんですが今回は後ろに村がありますから壁を作るんです。部隊を三つに分けるのは横に広げると私の指示が届かない場合があるからです。指示が無く混乱するよりは多少指示が違っていても部隊を分けて行動させる方がいいんです。まあそこから生まれる混乱

もありますが、うちは優秀なのでそんな事はない」と信じます

幼い割にはしっかりしていて渡はびっくりした。

自分がこの位の頃にはいつも友だちとゲームで遊んでいたはずな  
のだが。

小学校時代はまだいじめは受けていなかつたのだ。

「何か質問はありますか?」

ぼんやりしている所に話しかけられたので渡は虚を突かれた。

「ああ、いや……特にないよ」

渡が笑つて「まかしたがエリスは気がつかなかつたようだ。

エリスは部隊編成の紙を脇にどけると魔獣情報の紙を取り出した。

「あとはこれですね……。ちょっと長くなりますが構いませんか?」

「うん、別に構わないよ」

ならば、とエリスはこほん、と咳を一つする。

「そもそも魔獣には大きく分けて一つあって、一つは憑依型。もう一つは瘴気型です。どちらもその名の通り生き物に憑依するか瘴気がそのまま魔獣になるかなんですけど、どちらにも特徴があります。憑依型は戦闘能力が高いです。まあこの世に存在している生物を糧としているわけですから当然ですね。その生き物の限界を超えてしまつんです。瘴気型は核を叩かない限り無限に増殖します。……まあこれは獣といつていいのか分かりませんが、どちらも面倒というのは確かです。魔獣は無差別に破壊を繰り返すのでそこに住んでい

る住人からしてみればとても危険な存在です。そういうわけでただの獣の討伐ならば例外を除いて各皆に駐在している兵士が行くわけですけど、このよつたな魔獣の場合は直属部隊が派遣されるわけです。

「

渡はエリスの長い説教のような教えに圧倒された。  
学校にもこんな先生がいた気がする。

「今回の魔獣は瘴気型ですので長期戦が予想されます。なので作戦を立てました」

「作戦？」

「はい。それは……」

渡が注目して聞く。

「隊の事は他に任せてワタルさんと私で突っ込みます」

（それって作戦じゃないでしょ……）

渡はあまりの作戦に呆れた。

エリスも渡の様子を見て呆れているのが分かるらしい。

「いや、作戦じゃないだろとか思つてるかもしませんがこれが一番手っ取り早いんです！魔獣は村のさらに奥の方で発生しているみたいですから後ろには漏らせませんし……」

「でも結構無理あると思つよ？だつて一人だけつて・・・」

「ワタルさんがこのまえの決闘みたいなのを出せねばちょちょいのちょいなんです！……隊長命令です！ 突撃しなさい！――」

そういうのつて職権乱用つていうんじゃないかな、と渡はまた呆れる。

だが渡がこの前のをできれば一気に終わる事も事実だろ？  
仕方が無いので了承する事にした。

「わかりましたよエリス隊長……。でそれはいつ皆に言つんですか？」

「・・・これが終わつたら早く言わないといけないです。まあ遠征の件についてはもう言つてあるのであとは編成だけですね。これは私がやつときますのでワタルさんは準備でもしててください」

エリスはそういう立ち上がるとテーブルの上の紙をまとめ始めた。

「ではこれで終わりにします。あとは自分の装備の点検でもしていいでください」

エリスは一度お辞儀をしてから会議室から出て行った。  
渡は一人会議室に残される。

「……じゃあ部屋に戻りますか

渡はそういうて立ち上がり私室に向かつた。

~~~~~

装備の点検といつてもやり方がわからなかつた。

とりあえずマイ武器を布で拭いたり、この前貰つた砥石で見よう
見まねで研いでみたりしたのだが。

前よりはちよつとだけ鋭くなつたような氣もする薙刀を見て渡は
ため息をつく。

(初陣か……まさか死にはしないよな)

既に死んでいる渡だがもう一度死んでもいいといつゝ氣には全くな
らなかつた。

渡はベッドにぐらんと横になる。

何もすることができないのでとりあえず夕食の時間まで寝る事にした。

~~~~~

「……せん、ワタ……せ、おきてくださいー。」

渡は誰かの声に目を覚ました。

誰かが渡を見下ろしているらしくがほんやりしていて良く見えない。

「ワタルさん……あ、起きましたか？」

渡を見下ろしていしたのはエリスだった。

部屋は暗く、もう日も暮れてしまったのだろう。

「もう夕食の時間です。早く食堂に行かないとまた食べるものがなくなりますよ」

渡はむくつ、と上体を起します。

「う……ああ、分かった。ありがとうございます」

「はやく起きなさいね」

エリスは渡に笑いかけると部屋を出て行つた。

渡もベッドから這い出で目を覚ましてから食堂に向かつた。

食堂はもう大体が食べ終わっていたのかがらんとしていた。こののはエリスと数人の兵士だけである。

渡はカウンターに向かつ。

「いらっしゃいませワタルさん。寝ていたそうですが……疲れてました?」

「いや、そんなことはないよ。横になつてたらいつの間にか寝てただけだし」

カウンターの若者は料理の載つたお盆を渡しながら話しかけてきた。

「明日は遠征だですからしつかり疲れを取つてくださいね」

「うん、ありがと」

渡は片手で若者に手を振つて手近にある席に座る。献立はスープとパンと大きな焼かれた肉が一切れ。献立としては寂しいがそれぞの器が大きいのでこれだけで満腹になる。

しばらくして食べ終わるとカウンターにお盆を返す。

周りを見渡すとさつきまでいた兵士はいつの間にかいなくなつていて、食堂には渡とエリスしかいなくなつていた。

しかもエリスはまだ大きな肉とパンと格闘している。

渡は何気なくエリスの向かいの席に座つた。

「まだ食べてるの?」

エリスは話しかけられて初めて渡に気がついたらしく。

「ムグ……あ、ワタルさん……」

Hリスのお盆を見てみるとまだ半分くらいしか減っていなかつた。

「あの、これお願ひします!」

Hリスはそうこうてお盆を丸いと渡さない。

「いや、俺も今夕食食べたばっかりだし……」

「たくさん食べないと大きくなりませんよー。わ、お願ひします!」

大きくならないのはあなたの方では? と聞きたかったがややこしくなりやうなので仕方なく食べる事にする。  
だが、

(ん? もしかしてこれって間接……)

Hリスはもう満腹を超えているらしくお腹を押さえて苦しそうにしている。

悩んでこるのは渡だけのようだ。  
渡は意を決してスープに口をつける。

(……ちゅうと冷めてる)

味に変わりは無かつた。

エリスはまだお腹を押さえて唸つてゐる。

相手が気にしていないのに自分だけ気にするのも何か変なので無視して全部平らげる事にする。

まだ半分残つてゐる夕食と格闘していると苦しみから解放された

エリスが声をかけた。

「「ひつ…… そうこえればワタルさん。明日の服装はその『ジャージ』とかこののでいいんですか?」

渡は料理をほおばりながら答える。

「んぐ、ほえしはなこし。ここほ

「これしかなこし、いこよ、といったつもりなのがエリスにはよく分からなかつたのか解読に時間がかかつた。

「いや、ワタルさんの神の国から持つてこられた唯一の物ですからほほほほになるのはビックリかな、と思つたんですが…… それでいいならいいですよ

「……服つて貸してくれるの?」

「はい、ワタルさんにも服は支給されますよ。なんかそれを気に入つていいやつでしたので今まで言こませんでしたが

渡は今までジャージを夜の内に洗濯して夜は全裸で寝て、朝にちよつと湿つてこいる服を身にまといて生活していたので有り難い話だつた。

「出来れば貸して欲しいなあ。こままで朝湿つたままだつたからさ

「せうですか。じゃあ明日の朝まで一式用意をせとまわすね

エリスはそつこつて手元にあつたコップの水を一口飲む。

渡は再びお盆に視線を落とし、スプーンとフォークを武器に格闘を始めた。

エリスはただ無言で渡が料理と格闘している様を眺めていたので渡には少し気まずい空気が流れる。

しばらくその空気が続いたが渡が夕食に勝利するとエリスはそのお盆を持って席を立つ。

「ありがとうございました。いつもだったら他の誰かに食べてもらいうんですが今日は遅れてしまつて誰もいなかつたんですよ」

エリスはカウンターにお盆を返すと渡と一緒に部屋へ戻つた。

(こんなに食べちゃあ眠れそうに無いな・・・)

＼＼＼＼＼

次の日。

「渡さん、おきてくださいよー」

渡は誰かが扉を叩く音で眼を覚ます。

「渡せーん？ 入りますよー」

その声とともに扉のノブがガチャリ、と動く。

「んな……待つてー俺今……」

渡の声は最後まで扉かず扉からエリスが入ってきた。  
しかし渡はいつも通り全裸で寝ている。

布団をかけて寝ていたのが不幸中の幸いだった。

エリスは口を開きかけたがそこから声が出ること無く、代わりに顔がみるみる赤くなつていぐ。

「……っー」

エリスは持つていたものをその場に落とすと走り去ってしまった。  
たぶん昨日言っていた服の一式を渡の部屋に届けようとしたのだ  
らう。

「……一応後で謝つとくか」

どちらも悪いわけではないのだが渡には申し訳なさがあった。  
とはいえたまま裸でいるわけにはいかないのでエリスが落とし  
ていった服を着ることにした。

その服は見るからに『布の服』といった感じで、普段着のようだ。  
渡はその服を着てから食堂に向かった。

食堂は既に混雑していて人ごみの中に潰されそうになつた。  
渡はやつとの事でカウンターにたどり着くと若者に声をかけた。

「おはよ。俺の分の食事をくれるかい？」

「あ、おはよ。やむこますワタルわん。今日はあの服じゃないんで  
すね」

初日から散々だった若者とも冗談を交わす事ができるほど仲になつてゐる。

若者は渡と話をしながらもお盆に料理を盛り付けていく。

「今日の昼に出発りしこですからね。準備はしつかりとしていく  
ださいよ~。」

「ああ、分かってるよ。じゃあ

渡は若者と別れると空いている席を探したが見つからなかつた。  
仕方が無いので広間で食べる事にする。  
お盆を持って広間に行くとそこでは数人の兵士とエリスがいた。  
渡は動搖してお盆を落としそうになる。

(……よし、こんなで動搖してられるか!)

渡は意を決してひとつソファを選んで座る。

エリスも渡に気が付いたらじへ一瞬吹き出しそうになるが「じりん  
た。

エリスはいろんな意味で顔を真つ赤にさせていたがよつやく落ち  
着いたらしく手元にあつたコップの水を空にする。

そしてエリスは渡に笑いかけた。

渡もエリスに笑いを返す。

エリスは目を瞑つてなにかを唱えるとお盆を持って立ち上がり、

渡に近づいてきた。

渡は少し身構えてエリスを見る。

「……」ほん。ワタルさん先ほどはすみませんでした

「いや……別に、いいよ」

緊張しているせいか二人の動きはぎこちない。

「それでお詫びをしたいんです」

渡がそんなのいいよ、と黙りつとじたのだが、

「」の朝食半分上げます！ それでは……

渡に半分以上残った朝食を押し付けて走り去ってしまった。  
しばらく呆然としていた渡だったが、

（丁寧に見えて結構子供っぽい事するんだな）

年相応の行動にちょっとだけ親近感を覚えたのであった。

「ではこれから遠征に出発します。各自準備はできていますね？」

「こゝは因幡隊の兵舎前。

隊員全てがこゝにあつまっています。  
脇には馬車が数台ほど。

「では、出発！」

ヒリスの一聲で因幡隊が遠征に出発した。

「ワタルさん情けないですよ？まだ出発して一時と半分。ほり、後半田もあれば村につきますから」

「つ、疲れた……」

出発してから一日と少し。  
渡は完全にくばついていた。

「なんで並びんぴんしてんの？ 丸一日くら歩き詰めなの……」

「やつこつ風に鍛えられてるんです。……仕方ないので馬車の荷台にお邪魔しててください」

渡はエリスの言われたとおりに馬車の荷台に乗り込む。馬車の荷台は幌が付いていて、その中には干し肉などの食料がつまれていた。

「……ふう~」

渡はその荷台に腰掛ける。

馬車は列の後ろにいるので渡の視界にはただ森の道が続いていた。馬車は「じごじ」とと荷台を揺らしながら進んでいく。渡は故郷のこと思い出した。

森の縁なんて全く無くて、縁といえば街路樹のみ。

周りは背の高いビル。アリの巣のように張り巡らされた地下街。なんの思い出もなかつた故郷だが今更帰りたくなつてきた。

(母さん、父さん、今頃何やつてるかな!!弔…)

渡は誰もいない荷台でため息をつく。その時。

「よ、元気いやつてるか?..」

驚いて後ろを振り返るといつだかのロワーラ神が樽の上に腰掛けていた。

「んなつー。何でお前にここにいるんだよー。」

「声がでかい馬鹿者! 外に聞こえるだら、

渡は荷台から馬車の前を見てみる。

「とりあえず誰も気が付いていないようだ。

「んで？ 神様が何の用で」「どこで」

「何で？ 神様が何の用で」「どこで」

神は大きくため息をついた。

「それが困った事が起つてな……」

神は言葉を続ける。

「その前に私がお前をこの世界に生き返らせたのは理由があるんだ」

「この前なんとなくつて言つたじやん」

すると神はまた大きくため息をついた。

「お前はアホか。いくら神とは言えなんとなく生き返せると思つていいのか？」

「出来るからやつたんじゃないの？」

今度は神は頭を抱えた。

「なんで私はこんな馬鹿野郎を選んでしまったのか……」「ひみつもない馬鹿だ……」

「これには流石の渡も黙つていられない。」

「なんだよ人のことを馬鹿馬鹿つて！ お前が俺を生き返らせたのが悪いんだろ？！…」

神は素直に頭を垂れた。

「うん。 私が悪かった。 すまん」

「謝るなよ！…」

思わず思い切り突っ込んでしまったが、 静かにしなければいけないのを思って口をつぐむ。

「まあ冗談はいいへんにして、 本題に入るぞ」

渡は神に耳を傾ける。

「やつあこつたお前をいいに生を返らせた理由だが、 やつてほしこどがあるからだ」

「やつてほしこど？」

「ああ。 それは……」

神は一呼吸置いてから言った。

「魔王、 と呼ばれている奴を倒して欲しい」

渡の頭の上にはてなマークが浮かぶ。

「おい、はてなマークがみえみえだぞ……。まあよーするこの世界の魔王を倒せっていうわけだ」

「なんで俺が勇者みたいな事しなくちゃいけないんだよ」

「お前があのタイミングで馬鹿な死に方をしたからだらうが」

「いきなり図星を突かれて渡は何もいえなくなる。

「そいつはこの世界では知る奴は誰もいないんだが、他の世界ではとんでもない奴だったんだ」

「どんな？」

「あいつは生まれつきありえないほど魔力の持ち主でな、最初は良かつたんだがだんだん狂い始めて、最終的にはあいつは世界を渡つてしまつた。神である私が特例として渡らせたお前はいいんだが世界の住人が勝手に世界を渡るのは非常に危険な事だ」

神はわざわざまでの「冗談はどうにもなく、とても真剣な顔だ。

「だから私はそいつを殺さねばならん。しかし他にもやることはある。だからお前みたいなのが必要になつたわけだ」

「ふ~ん、じゃあ結構急がないとやばいの?」

「できれば、な。だがお前がのここつてもただ殺されるだけだからちゃんと鍛えてからだ。いいな?」

神の言葉に渡は頷く。

「よし、なにばいこだらう。私は帰る。誰か近づいて来たみたいだ  
しな

渡がはなつと振り返るとひよこりとHリスが顔を出した。

「ワタルさん誰かいたんですか？ 話し声が聞こえたんですけど」

Hリスの間に渡はぶんぶんと首を振る。

「いや、誰もいないよー。気のせこじやないかな？」

「ならいいです。……そろそろ着きまあから準備してくださーね」

Hリスはそろそろ前に戻つてしまつ。

渡は大きくため息をついた。

(危なかつた・・・。じゃそろそろ降りるか)

渡は荷台を降つると先頭に向かう。

まっすぐな道の先に村の門が見えた。

「遠路わざわざ疲れたでしょ。とつあえずお休みにななつてくだ  
れれ」

村に入ると村長りしき白髪のおじいちゃんが出迎えた。

「あつがとひじれこます。ではお言葉に甘えて」

エリスが合図をすると兵士たちはテントを張りに散りばれる。  
村長はエリスに声をかけた。

「ちよつとお話をあります。よろしいですか」

「はい、なんぞじょ」

「いえ、特別なものではないんですけど……。今回私たちの村を襲つた魔獸ですが、報告したとおり瘴氣型とおもわれます。しかし……」

「しかし?」

「しかし、瘴氣型なのに強さが類を見ないほどなのです。この村の猛者も討伐に向かいましたが返り討ちに遭いました。どうかお氣をつけ下され。何かできることがあれば我々も協力します」

「ありがとうございます。何かあつたら頼らせていただきますね」

エリスと村長は礼をするとそれの方向へ歩いていった。

「さてワタルさん。明日の早朝、魔獸討伐に向かいます。今日は疲れをしつかりとつてくださいね」

「うん、わかったよ」

「では私も夕食を作りにいきますか」

隊員たちは円形にテントを張つていて、その中心が火になるよう

になつてゐるらしい。

男性隊員はテント設営、女性隊員は火おこしと食事作りをしてい  
るらしい。

渡とエリスは別れて、それぞれの場所に向かつた。  
渡はテント設営を手伝おうとしたがやり方がわからぬいために呆然としていた。

「おこ、ワタル！ ぼけーっとしてないで」手伝えよー」

声の方向を振り返るとガルザックがいた。後何人かでテント設営をしているらしい。

「いや、テントの建て方なんて分からぬですよ、俺」

「んなこたあどうでもいいんだ。見て、やつてみて慣れる。それだけだ」

ガルザックはそれだけ言つと手元に集中してしまつ。

「このままでは居場所が無いのでとりあえずなんでもいいから手伝う事にした。

しかし、

「釘はもう打つてるだろ」

「布はそこに広げてるし」

「ちよ、そこ違ひつて—それはひつち—」

いろいろあつた結果、渡は男子から追い出された。

ガルザックも、

「いや、テント張るだけが貢献じゃねえしな……女共手伝つて来い？あつちは人手が足りてないはずだしな」

やんわりと否定した。

（うう、ガルザックさん酷い……慣れろつて言つたのに……）

渡は渋々テントの中央に向かつ。  
そこでは既にキャンプファイアーみたいな炎がごうごう燃えていた。

「あれ？ どうしたんですかワタルさん。テントは終わりました？」

渡に気がついたエリスが振り返る。  
つられて他の女性隊員も渡を見た。

「それが、テント張るうとしたら邪魔になつて……追い出された」  
そこにはる全員の目が冷めるのを渡は感じた。

「ワタルさんって凄い人つて聞いてましたけど……」

「うん、なんか……」

「いや、ミーシャ隊長を倒したつて言つてたし……」

「でも流石にねえ……」

好き放題に喋る女子の言葉にひたすらじめられていた渡はとうとう逃げた。

「うめえこなー テントの張り方分かんなかつただけで他ではまつてやるこーーー！」

「じゃあ水汲んできて。もっとできるんでしょ？」

気がついた時には時既に遅し。

（くつ、嵌められたー！）

「よろしくお願ひしますよ、ワタルさん」

金髪の背も高く起伏も激しい女が渡にバケツみたいな桶を渡してくれる。

そのエリスは少し離れた所で申し訳なさそうな笑みをこぼした。エリスとは何もかもが正反対だ。

渡はそんなエリスをまぶしく思いつつおとなしくすぐ近くの小川に水を汲みにいった。

小川はテントのすぐ後ろにあり、さうむらさきを立てて水が流れている。

渡はそこから水を汲んで火の近くの寸胴に入れる。それでも溜まつたのはほんの少し。

（なんて氣の遠くなる作業だ・・・）

渡は思わずため息を付いたが他で役に立てるような仕事はない。  
仕方なく黙々と水汲みをこなすしかないのだ。  
そう心に決めて小川と寸胴を往復するのだが、

(これほんとに溜まつてるか?)

何回往復しても増えている気がしないのだ。

周りの女は全員食材の準備をしているし、男もテント設営が終わつたのか荷物の確認をしている。

渡は気のせいだ、と頭を振つて水汲みを再開する。そろそろ疲れて息が切ってきた頃、

「絶対溜まつてないよ!」わーー!! うめでやつてゐるの!! うじゆ

渡がほえると後ろにいたさつきの金髪がぶるぶる震えていた。  
渡がそちらに視線を向けると金髪も気が付いたらしく口を押さえ  
て後ろを向いた。

渡は桶を振りかざして金髪に殴りかかる。  
だがここまで溜め込んだ疲労で足がもつれて転んでしまった。  
起き上がろうとしたがそのまま意識が遠くなる。

( せんせい と くわん )

疲労困憊の渡が襲い来る眠気に勝てるわけが無く、そのまま意識はブラックアウトした。

~~~~~

渡が目が覚めたときには辺りはもう真っ暗で、人影も見えないので皆寝てしまつたのだろう。
渡はテントから少し外れた木にもたれかかつており、誰かがここまで連んでくれたのだろう。

(たしか、水汲みしてて……)

立ち上がりながら思い出そうとしたとき、腹が鳴った。

「……腹減つた」

そういうえば、と夕飯を食べていないのを思い出す。

「飯まだ余ってるかな……」

渡は火の近くに寸胴を見るとその中身を確認する。
そこには、

「何にも無い！？」

渡は絶望した。

そこで記憶が一気に頭に流れ込んできた。
あんなに頑張ったのに、あんなにがんばったのに、アンナーラン
バッタノー……。

あのクソアマ……！

渡が標的を確認し、搜索を開始する。
と、その時。

「あ、ワタルさん起きました？」

どこからかエリスが現れた。

「あれ？ 皆寝たんじゃないの？」

その言葉にエリスは苦笑いする。

「他の人は皆寝ちゃいました」

エリスの手には空の目とお玉が握られている。

「先ほどはすみませんでした。あの子普段はいい子なんですが今日
になつてこきなりワタルさんにいじわるしてしまって……」

エリスの言葉にさきまでのイライラが吹き飛んでしまつた。

「そんな……いいよ。エリスが悪いわけじゃないし」

「本当にすみません……。お詫びといつては足りないかも知れませんが、夕食を少し残しておきました。……食べます？」

渡は皿を輝かせる。

「この子は天使なのか？」

「……いいの？」

「ええ、ぜひ」

渡は思わず目頭が熱くなる。

なんてよくできた子だろうか。

「早速頂いていい？」

「じゃあいっしに残してますのでついて来てください」

エリスはそういうてさつきの小川の方へ行く。

そこでは小さな焚き火があつて、その上に鍋があつた。

鍋にはおいしそうなスープが温められていて、渡の鼻をくすぐる。

エリスは持っていた皿にスープをよそうと、渡に差し出した。

渡はエリスからスープを受け取るとスプーンを使わずにがぶがぶ飲み始めた。

「もう一杯！」

はい、とエリスは笑つて受け取るとまた皿によそつ。それを二回くらう繰り返した所で渡は止まった。

「ふーー、『ひかり』

「はー。パンもあつたんですね。それは皆食べられちゃいました」

「いや、あれだけでもありがたいよ。ありがと」

それを聞いたH里斯は少し恥ずかしそうに笑つた。

「じゃあ明日に備えて早く寝ましょ。面倒でるのでテントは使えませんけど」

「やうか……どうよつか

「まあこのままここで寝ればいいですよ

H里斯は自分の荷物を枕にするとそのままごろんと横になる。渡としては女の子と寝るなんてとんでもない事だったが、仕方が無いので横になる。

H里斯は横になつたまま渡に笑いかけるとそのまま目を閉じる。渡は顔が熱くなるのを感じたがぶんぶんと頭を振つて目を閉じた。緊張して寝られないと思つたがまだ疲労が残つていて、ぐぐに眠気が襲つてきた。

「ワタルセーん、起きてくださいーー」

すぐ耳元で声がする。

「ん？」

皿を開けると皿の前にエリスがいた。

「うわー」

「あ、起きましたね。」

渡はむくつ、と上体を起こす。
よく見ると昨日の金髪もこる。

「ほらペル、ちゃんと謝らなきゃ

その金髪はペルというらしい。

謝るとは昨日の事だろう。

どうみてもペルのほうが姉な感じなのだが今はエリスが姉みたいだ。

そのペルは露骨にいやそうな顔をしている。

（俺つて彼女に何かしたつけ？）

渡にはいまいち理由が分からなかつた。

「どうもすみませんでした」

反省の色が見えなごどいか、お前が反省しそやボケと田で語つてこる。

とにかくペルは渡のことが嫌いらしい。

ペルはそれで謝ったつもりなのかそのまますたと去つてしまつた。

「すみません。普段はあんないやないんですが……」

「いや、いいよ別に。やつこう事もあるわ」

Hリスはしづかべに渡に謝つていたが、どうにか渡がなだめて朝食を食べる事にした。

渡は結局スープしか食べてないので空腹感を通り越してお腹の辺りに喪失感がある。

渡はその日の朝食をがつがつと食べた。

だが他の隊員からは特に嫌がられることが無く、逆に同情の田で渡を見ていた。

中には自分の分まで差し出す隊員もいたが、流石に渡は断つた。朝食を食べ終わると手早く準備をする。

装備の確認、携帯品の確認、テントの片付け等。

渡はテントの片付けもできないし、ペルもいるし、荷物も何も無いので結局流れる小川をただ見ていた。

さりせりと流れる小川を膝を抱えて眺めていると後ろから声をかけられた。

「おこワタル！ そろそろいひか！」

振り向くとガルザックが立っていた。

「はい、分かりました」

渡はよいしょ、と立ち上がると戻つていった。

「あ、戻つてきましたね」

見ると全ての隊員が整列していた。

しかし兵舎に並んでいた時とは違い、三つに分かれている。

「これから魔獣討伐に向かいます。作戦通り部隊を三つに分け横にします。魔獣は後ろに漏らさないで下さい。以上！」

エリスの簡単な説明が終わると一息置いていった。

「出発！」

道は村の外をぐるりと回つて反対側にいくような感じだ。
反対側に付くと獣道しかなく、森の中を木を避けながら行動する事になった。

隣の部隊がきつぎり見えるくらいの距離を保ちつつゆっくりと前進する。

辺りは隣の人の息遣いまで聞こえそうなほどひつねりとしていて、それが逆に緊張感を煽らせた。

渡はまだ戦闘の経験が無いので全方位から襲い掛かられそうで辺りをきよろきよろと見回している。

「……ワタルさん、そんなにきよひきよひしてもまだいませんよ」

あまりにもきよらかにしすぎてエリスに言われてしまつた。

କଣ୍ଠରେ

んでいく。

そんな状態がしばらくつづいたその時。

「敵襲！」

右の方から声が上がった。

全員が右を向くが、エリスだけは前を見たままだ。

「あの子達なら何とかやつてくれます。」このまま前に進みましょう。

こういうところで人格が現れるんだろうなあ、と渡はしみじみ思
いながら心の中でつぶやく。

ため息をついて前を見た瞬間。

田の前の草むらががさがさつ、と動いた。

全員が身構える。

案の定報告された瘴気型の魔獸らしい。

真っ黒の四足の獸のようで、見た目は狼みたいだ。

「敵襲！」

エリスが叫び、突つ込んだ。

だがエリスが敵に切り込む前に後ろから砲撃のようなものが魔獣

に当たり、全て吹き飛んでしまった。

放ったのはペル。

口は悪いが腕はいいらしー。

だが渡にとつては魔法とくのを初めて見るので驚きしか残らな
い。

「ペル、途中まで援護お願ー！ ワタルさんこあますよー！」

「おーーー」「はーーー」

エリスが突つ込むのにあわせて渡とペルがエリスに続く。
草むらを抜けるとわつきの魔獣がうじゅうじゅいた。
しかし三人は臆することなく（渡は一人につられて）その中に飛
び込む。

また渡の後ろからの砲撃。

前方で大きな土煙が上がり、何匹かの魔獣が宙を舞う。
煙が晴れたときにはいくつかの魔獣が減っている。
が、数が多くてあまり変わっていないようにも見えた。

「ペルもうこーよー 後ろの援護に回つてー！」

「……わかりました」

ペルはエリスに答えると後ろへ下がつていく。

「ワタルさん、私たちは最小限の敵を倒しながらこのまま進みます

！ 弱点は体の中心！」

エリスはそこにつつて的確に魔獣の胴を一刀流で切り捨てていく。

渡もエリスに負けるわけにはいかないので体の中心を狙つて次々切つていいく。

切られた魔獸は霧散し、跡形も無くなつた。

前に進むにつれて多くなつていく魔獸を相手に一人は前への道を切り開く。

飛び掛つてくる敵をそのまま串刺しにし、挟み撃ちは体を捻つてまとめて叩き落す。

互いに互いを助け合いながら前に進んでいく（といつても渡は素人なのでほほエリスが助けているが）。

そうして切つた魔獸が100を超えようかとしたその時。いきなり魔獸がいなくなり、後ろの魔獸も追撃してこなくなつた。渡は訳が分からず頭をかしげていたがエリスは前をにらみつけている。

「……ワタルさん、こいつが今回の討伐対象です」

そういわれて前を見る渡。
そこには、

「……いや、でかすぎでしょ」

4メートルを越す身長。

丸太のように太い腕と足。

一本の足で立ち、口と思われる部分からは真っ黒い瘴気が吐き出されている。

「見るからに強そうなんだけど」

「大丈夫です。ワタルさんも十分強いですから」

「いつが強いと認めているのだ。」
エリスからも緊張の色が見て取れる。

「来ますよー。」

エリスが言うのと同時に魔獣が低く沈み込む。
そして、

いきなり渡に突っ込んできた。

かろうじて反応できた渡は薙刀で受け止める。

が、

「つがはつーーー？」

受け止めきれず後ろに吹き飛ばされ、木にぶつかって止まる。
脳が揺れ、口の中に血の味が広がる。

（ぐあ……何が起こった？）

「ワタルさん！」

エリスが近寄つてこようとする。

しかし魔獣が渡を吹き飛ばした姿勢でエリスを裏拳で殴り飛ばす。
完全に不意をうたれたエリスは何も出来ずに吹き飛ばされた。

「ツエリスーーー！」

渡は動こうとするが脳が揺れたためふらふらしている。
その隙を魔獣は見逃さなかつた。

恐るべき加速で渡に近づくと渡に襲い掛かる。

渡はかろうじて避けるが体に掠り、後ろに倒されて尻餅をつく。その渡にさらに追撃を加えようとした魔獸だが、魔獸の動きがいきなり止まった。

魔獸の左肩を光線が貫通したのだ。

魔獸はゆっくりと後ろを振り向くと、そこには剣を構えたエリスが立っていた。

エリスは頭から血を流し、肩で息をしている。

「はあ、はあ、ワタルさんは……私が守りますから……」

その言葉に渡は衝撃を受けた。

エリスの言葉に感動したのではない。

エリスの言葉が悔しく思ったのだ。

何故自分は自分よりも年下の女の子に守られているのか？
何故自分はこんなにも非力なのか？

そう思っても魔獸は待ってくれなかつた。

魔獸は標的を渡からエリスに変え、完全に渡は眼中に入つていな

い。

エリスはそんな魔獸に臆することなく正面から立ち向かつてゐる。
魔獸が低く沈み込み、エリスが剣を構え直す。
魔獸が動くのとエリスが動くのは同時だつた。
互いに前に進み剣と拳を交える。

魔獸の拳をエリスは剣で受け流す。

エリスの剣を魔獸は多少受けつつも力で押す。

どちらが優勢か誰が見ても明らかだった。

エリスは一回でも攻撃を受けたら終わり。

対して魔獸は多少受けてもなんらダメージはない。エリスは魔獸の「ぐり押し」を上手く避けているがいつまでも続くわけではない。

そんな死闘を見て動けない渡は自分自身が悔しかった。

（ちくしょつ……一俺は何にも出来ないのか！？）

なんとかエリスを助けたい、しかし自分が割り込んでエリスの邪魔になるだけ。

一つの意見が渡の頭の中をぐるぐる駆け巡っていた。渡が何も出来ずに一人の死闘を見ていたその時。

戦局が変わった。

とうとうエリスが魔獸の攻撃を避けきれず魔獸の攻撃に当たる。軽々と空を舞うエリス。

それに追撃するつもりなのか、魔獸はエリスをにらんで体を低く沈める。

その瞬間、

渡の中のなにかが外れた。

今までは目にも追えなかつた魔獸が、今はゆっくりと見える。魔獸が低く沈み、そして飛び上がる瞬間 - - - - -

卷之三

渡は魔獣の何倍ものスピードで魔獣に飛び掛った。

そのままのスピードで魔兽を躊躇飛ばし、左手で空中にしたエリスを抱きかかる。

止まつた。

魔獸がむぐりと起きて、再び渡を敵として認識する。

に向けて言い放つた。。

「エリスは俺が守る！！！」

次の瞬間魔獣は今までよりもっと速く渡に飛び掛る。

しかし、源に手のひらにて止むて見ると、口に感じた

しかし、左の脇腹がおおきな隙になつていた。

源はそこを確認してから大きく踏み込んで魔兽の腹を横に切り裂く

渡と魔獣は背中で対峙する。

たが、魔獸の腹は両断されており、
がら上半身と下半身が離れていく。

魔獣の上半身が地上に落ちると、さすがに灰のようだ。風で吹き流され、何もなくなってしまった。

あつけない終わりだった。

渡はふう、とため息をつくとやういえば、とHリスに振り返った。
Hリスはぽかん、と田を丸くしておつ、状況がよく頭に入つてい
ないようだ。

「おーい、Hリスー。おこつてば」

しばらべHリスの田の前で手を振っていたのだがよつせへ動きが
あつた。

「え？ あれ？ ワタルさん……えつと、あの……あれ？」

動きはあつたが状況は掴めてないらしい。

「せひ、もう倒したよ。あいつ」

「えー？ 本当ですか？ いやだつてやうきの……」

そこまで言つてHリスは何かに気がついたのか、顔がぼんつと音
がするくらい顔が赤くなる。

「どしたの？」

「いえいえ何でもないですよー。じゃあ早く帰つてしまふがー。うさ、
やつしまつよー。」

Hリスはそこつて立ち上がり立つのだが、

「よこしよ……あれ？」のり、やつと……

「ほんとに大丈夫?」

「いえ……その、腰が抜けてしましました……」

女の子座りをしたままつんともすんとも動けない。

「んじゃあ……せり」

渡はエリスにじやがんで背を向ける。

渡は「こんな」とはしたくなかったが女の子にあんな事をさせてしまつたといつ罪悪感と、ほんの少しの好奇心が勝つてしまつた。

「ええ!? エット、じゃあお願ひします……」

エリスは渡の肩に手を伸ばす。

渡はそのまま持ち上げるとちょっとだけ姿勢を直す。

渡は女の子をおんぶなんてした事がなかつたのだが、ござしてみると思つたよりも軽く、息遣いや背中に何か当たるものがある

(いかん! 何考えてんだ俺! ——)

渡は一つ深呼吸してから言つた。

「じゃあ、帰るつか」

「は、ひやこ……」

何故エリスの声が裏返つたのか渡には分からなかつたがとりあえず無視してきた道を帰ることにする。

だが、

「Hリス？ なんか息が荒いけど？」か苦しそ？」

「いっいえっ！ なんかちやいでもしゅよつ……？」

「いくらなんでも噛みますだらつ、と渡は思った。
でもHリスの息遣いは確かに荒いし、伝わってくる鼓動も……

（だからそれやめり……）

思考が変な方向にいく前に正気に戻る渡。
頭をぶんぶんと横に振つて心を入れ替える。

「セツハナリイイケビ……」

会話が終わつてしまい、氣まずい空気が流れ。
しばり無言であるいていたが、いきなり渡の頭に衝撃が来た。
何かと思つて後ろを見るとHリスが頭を渡に預けているらしい。
渡は寝てるのかな？、と思つたが実際には頭がショートしただけ
である。

だが渡にひとつは氣まずい空気が断ち切られたの少しだけ氣が楽
になる。

しばり歩くとさつきペルと分かれた場所に来たのでそろそろ仲
間と合流できるかな、と思つたのだがそうでもなかつた。
思考をポジティブに切り替えてさらに進む。
だがいくらたつても誰の姿も見えない。
少し不安になつた渡は早歩きになる。
そこからしばらく歩くとやつと人影が見えた。

「おーい、皆ー！」

渡が小走りで近づいたのだが、

「……おひ、ワタルか……。よくやつた」

答えたガルザックは腹に包帯を巻いている。

他もどこかしらに包帯等を巻いている。

激しい戦闘だったらしく、周りの木も何本かへし折られている。

「大丈夫ですか？ガルザックさん」

「ここの傷はいつもの事よ……。それで？ボスはお前がやつたのか？」

「え？まあ、はい」

「やうか……」

その言葉にガルザックは深く息をついた。
そして勢い良く立ち上がる。

「よし、帰るか！ おーお前らー。ここの位でへばつてんじやねえぞ
ー！やつちやと準備済ませるーー。」

「いや、一回位待つたほうがいいんじゃないですか？」

「こつらはそんな弱く鍛えられてねえよ。されど渡、できればそのままエリスをおぶつていって欲しいんだが」

ガルザックの頼みの意味が良く分からなかつたが、断る理由は特に無いので一応頷いておく。

「ありがとう。……おーお前らー、準備おせーぞーー！」

その言葉を聞いた隊員たちは手早く準備を済ませる。

「じゃあ俺と渡で村長に挨拶していくからお前らは馬車に荷物積んどけ！ 分かつたなー！」

ガルザックの言葉に隊員たちはやる気のなさそうな返事をするが、素早く列を作つて戻つていつた。

「さて村に行くか……」

ガルザックは傍においてあつたリュックを片手で持つと、村の方に向に歩き出した。

少しう歩いて村の門が見えてくると、そこに村長と若い青年が立つていた。

「なんと……もつ終わつてしまつたのですか？」

「まあはい、頭を倒したのはこいつですが」

そういうてガルザックは渡を指差す。

「なんと……そんなにお苦いのによほどの力があるのですね」

「いえ、俺はただがむしゃらに戦つただけですから」

「そんなに謙遜なさりすに……。ただいま宴の準備をやめております。ぜひお越しすぐだれー」

村長のその言葉にガルザックはぽりぽりと頭を搔いた。

「ええと、すみませんがお礼はいいです」

「いえ、あなた様方は我々の命の恩人です。何かお礼をしないと気がすみません」

「別に私たちは礼を貰うためにこんな仕事をやつてるわけじゃありませんし。いつませんよ」

村長はその言葉に肩を落とす。

「いや、でもなにかわせてくれー。……あれを持ってきてくれ」

村長は後ろの青年に声をかけると青年は走つて村の中に行つてしまつた。

しばらくすると青年は小さな包みを持って來た。

「これはこの森のずっと奥で採れたティフラの実といいます。この木の実には魔法がかかっていて、神のご加護を受けられるといわれております」

「まづ、これがティフラの実……。ずいぶん高価なものだと思つが

？」

「「」なんものよりも命が助かった方がありがたい。ぜひ受け取つて

くだされ

ガルザックはこれは拒まずに受け取る。

「じゃあ俺たちほこれで」

「はい、少し残念ですが帰つてしまつのならば仕方がありません。
ありがとうございました」

村長が深々と頭を下げる、ガルザックは片手で返事をして帰つ
ていった。

「ふう、じゃあこれお前食え」

「ええ！？」

ガルザックはさつき受け取つたばかりのティーフラの実を渡に突き
出す。

「これしかないのにあいつ等に持つて行つたら絶対取り合つてになる。
だからここで処分しなきやいけないわけだが、俺はもう食つたこと
があるからな。だからお前が食え」

渡は思わず身を引くが、ガルザックはさつきの包みを渡にすいつ
と押し付ける。

「ほれ」

ガルザックは渡に真つ白な実を突き出す。

だが渡はエリスをおぶつてるので両手が使えない。

だからガルザックは渡の口に無理矢理押し込んだ。

「むぐつ」

渡はその実をもぐもぐと咀嚼する。
しかし、

「味ないですよ?」これ

「ほう、味がない……か」

渡には訳が分からぬがガルザックはうんうんと頷いている。

「ガルザックさん、これなんなんですか?」

「ああ、別になんでもない。……早く帰るぞ」

ガルザックは適当にはぐらかして先にすたすたと歩いていつてしまつた。

「ちょっと、待ってくださいよ!」

渡はエリスの位置を少し直すとガルザックをあつて走つていった。
こうして渡の初陣は終わつていつた。

～初陣～（後書き）

真に申し訳ありませんでした！！

こんなに更新が遅れるとは私自身思っていませんでした。

あれやこれやと予定が・・・え？ 訳はこらない？

はい、すみませんでした”めんなさい

さらに精進いたします。

～進展～（前書き）

後書きにて重大発表！

「ふいー、やつと帰つてきた……」

「まだ城壁が見えただけじゃねえか。よく言つだろ？　家に帰るまでが遠征だつて」

「……それは遠足じやね？　」

~~~~~

渡たちが遠征から帰つて一週間が経つた。

だが特にこれといったモノは無く、何か褒賞みたいなのがもらえるかなー、と期待していた渡にも少しの休暇しか与えられなかつた。ガルザックによると、自分たちの仕事の内だから特別な獲物を倒さない限り褒賞はないのだという。

そんな事よりも渡たちが帰つてきてから小さな事件が起きた。

エリスが渡を避けるのだ。

渡には心当たりなんてないし、周囲に聞いても適当にばぐらかすだけである。

そんな周りの様子を怪しく思いつつ、信頼できる仲間に相談する事にした。

ガルザックと食堂の若者である。

~~~~~

「はあ……」

「そう気を落とすなって。ちょっと……うん、ちょっとなんかあつただけだろ？」「

۱۵۷

「ここは食堂。面子は渡、ガルザック、食堂の若者（最近知ったが名前をルポといつらしい）である。

ここには三人以外誰もいないのだが、三人は一つのテーブルに身を寄せ合つようにしてこそこそと会議をしていた。その内容とは、

「いや、会議だつてままならないし。最近はガルザックさんも来てくれるけどそれでもおかしいよ、エリス。なにか心配事でもあるのか……」

勿論エリスの事である。

流石にエリスの事が心配になつたのだが、本人に直接聞くのも気が引けるのでエリスに近く、渡と親しい人を選んだ結果、この二人になつたのだ。

「まあお前が心配するほどのものでもねえだろ？ もうお前は成り行きを見守つて、最後にがつんと決めればいいのよ」

「そうです。ワタルさんが心配する事じやないです。流れに身を任せればいいんです」

その流れがわからんねえよ、と突つ込みたくなつたがこらえ。

「……つ、まあなるようになるか。本人の問題だし」

「そうそう。我々が首を突つ込む」とじやあありません。……まあもつ遅いですしじましょうよ！」

渡はルポの少し無理矢理な終わらせ方を怪しく思つたが実際眠くなつてきたので素直に従うことにする。

「それもそうだな……。じゃあこじらくんでお開きにするか

三人は立ち上がり食堂を出て広間にいく。

その間にガルザックとルポの二人は渡の後ろでこそこそと話して

いたが渡は気が付かなかった。

「じゃあここにで、おやすみなさい」

「おう、頑張れよ！」

「応援しますからー！」

ガルザックとルポはそういうて渡に親指を立てる。
渡は良く分からなかつたがとりあえず親指を立てて返した。

三人はそこで別れ、渡は一階へ向かった。

辺りは真っ暗で、不気味な雰囲気を醸し出していた。

（怖いなあ……早く寝よ）

そう思つて少し早歩きになつたその時、

「……ワタルさん」

「ギヤー！ー！」

渡は思わず2メートルも下がつてしまつた。

暗闇に慣れてきた目でよく見るとエリスが立つていた。
俯いているため顔の表情は良く見えない。

「どうどうしたの？エリス」

Hリスは渡の言葉に肩をビクッと震わせると渡を見た。

その皿はすこし赤みがかっている。

今にも泣き出しそうな顔だ。

「……ワタルさんを、待つて、たんですばど……中々こなにからこにこだら怖くなつちやつて……」

「あ、そつかそつか。ごめんね、待たせりやつて」

その声を聞くとHリスは顔まで真つ赤になつた。

「こついやー、それほどじやないですよー!? 私が勝手に待つてただけですし!」

渡には良く分からなかつたが、とつあえず元気になつたようなのでよしとする。

「で? 用事つて何?」

Hリスは少し固まつてから、深呼吸をしてこつた。

「明日、買ひ物につか……買ひ物と一緒につてくれましょんか?」

何故言つ直したのかも、曖んだ事もとつあえず脇に置いて置く事にする。

「買ひ物……別に構わないよ。休暇も余つてたし。明日買ひ物に付かねばいいんだね?」

その言葉を聞いた瞬間、エリスは後ろにバタン、とぶつ倒れた。渡はいきなりの事に戸惑つたが、エリスはまた起き上がる。

「ありがとうございます！ では、明日の朝食の後でよろしいでしょうかっ！」

エリスのは所々で声が裏返つている。渡はそれも脇に置いておく事にした。

「うん、わかった。じゃあまた明日」

「ひゃー！ また明日でしゅ！」

エリスはそれだけ言い残すと全力で自分の部屋に戻つていった。渡はエリスの行動を不思議に思つたが元気そうなのでよしとする。それから渡も自分の部屋に戻つていった。

後ろにいた人影にも気づかず……。

～進展～（後書き）

ここで重大発表があります！

なんと！

パソコンぶつ壊れたorz

いや、起動するにはするんだけどなんか調子がおかしくて・・・

復旧のめどは立っていません。

最悪、一ヶ月も二ヶ月も放置になるかもしだせんので報告をせていただきます。

真に申し訳ございません(- -) m

～買い物～（前書き）

ダイナミック 土下座

ほんつつとにござめんなさい！

何だかんだで一ヶ月ちょっとも休んでしまいましたorz
これからも精進いたします

「ふいー、満腹満腹」

「ワタルさん、あなた今日エリスさんと一緒にテークアウトでどう? そんなに食べていいいんですか?」

「空腹で倒れるほうが格好悪いだろ。腹が減っているよりも満腹のほうが気持ちも落ち着くし」

「まあ、それでいいならいですが……エリスさんはほとんど何も食べていきませんでしたよ?」

「……」

次の日。

空は快晴、これでもか! といつほど太陽が照りつける。
その日差しと門の警備をしている兵士の視線が少しだけ痛い。

「お、おひやよ！」じゅこましゅ……」

「Hリス、流石にかみ過だらいいだら。まあ、ねまよつ」
ぎこちなく挨拶を交わす一人。

その後の気まずい空気には耐えられず一人は視線を宙に漂わせる。
この空気を何とか壊すべく、頑張って口を開く。

「……今日のHリス、可愛いな」

言ってしまってから渡はしまった、と口の中で呟いた。
それは一人の服は隊の制服だからである。

理由は一つある。

一つは緊急時のために。

休日くらい私服でも、という声もあるのだが、魔物の襲撃等の非常事態に私服でいるわけにはいかない。

もう一つは防犯のため。

形だけでも軍の制服をきて街を歩くだけで事を起こさうとする輩を牽制できるのだ。
そんなわけで軍属の者には特例を除いて常に隊の制服でいることを命じている。

今の渡たちも例外ではなく、いつもと何も変わらない服装なのだ。
だから今日は、というのはありえないはずなのである。

渡は恐るおそるHリスを見る。
すると、

「かわ、可愛い……？」私が、かわ、いい。渡さんが……」

等と頬を押さえてふつふつと呟くエリスがいた。

渡はよくわからなかつたが、とりあえず最悪の事態を免れたことだけはわかつた。

この空気を無駄にしないために渡はさらに追い討ちをかける。

「そうだよ。なんか今日のエリスは輝いてるっていうか……可愛いというよりもきれいつて感じかな」

その瞬間エリスの震えが止まる。

そしてエリスの中の何かにスイッチが入った。

何かよく分からな
い しかし激しい光がその目は点る

「いいい行きますよワタルさん！」

「うわわわわわー！ ちゅうとこせなつすがではー。」

勢いよく渡の腕をつかんで走り出すエリス。

小柄な体からは想像もできないような強い力で引かれる渡。あつという間に一人は見えなくなり、もとの静かな朝が戻る。

しかしその中に、

(よし……尾行開始です)

怪しい人影があつた。

＼＼＼＼＼

「えーっと、ここのが薬屋。ここが肉屋。それでこれが刃物屋ですね」

渡とエリスの二人は町の中心部に来ていた。

ここはあらゆる店が立ち並び、様々なものが手に入る。

この中心部は大きく分けて北と南に分かれています。北は冒険者や旅人用の商店街。南は生活者用の商店街である。

その品揃えも徹底的に違っています。例えば北と南に同じ『薬屋』があつたとしても、北では薬草や毒消し、南では香草等が売られています。

しかし生活者であつても北の商店街にいくこともあるのだが（その逆も）。

二人は今南の生活者用の商店街に来ています。

「この刃物屋さんはあくまで包丁とかの生活用品ですから武器がほしかつたら北区商店街に行つてください。略して『北商』です」

「じゃあこいつは『南商』っていうのか？」

「はい。まあ呼ぶ人それぞれによつて名称は違いますけど」

さつきのよつたエリスのテンションも説明者になつた途端に落ち着いた。

ヒリスが街のことについてあれこれ話しながら一人は進んでいく。二人は隊の制服を着ているため少し浮いているのだがまったく気にしてない、もしくは気がついていないようだ。

しかし一人はちょっとした問題一つを抱えていた。あれやこれやと雑談を交わす一人に横から声がかけられた。

「おっ、ヒリスちゃんじゃねえか！ 久しづりだなあ！」

声の方向を向くと鮮度のよさそうな魚を三枚に分けていた男がいた。

丸い頭とがつちりした体が特徴で肌は浅黒く焼けている。

「ヒンガルドさん！ お久しづりですね。一ヶ月ぶりですか？」

「ああ、大体そんな感じだらうなあ……。その隣の奴はこないだの……」

「ああ、はい。渡といいます」

「そうそうー、ヒリスちゃんは可愛いけどちよつと抜けてるとこが
あるから、よろしくなー！」

「ああ、はい」

「ヒンガルドさんまでそんなことを……」

そう、一人が商店街に入つてから話しかける人全てがこの話題なのである。

布屋のおばさんにも、肉屋のおじいさんや、宿屋の番をしていた青年まで、全てである。

最初の「うはは」にならなかつたのだが、ここまでもぐんだんだん飽きてきてしまつ。

一人が抱える問題の一つである。

もう一つは、

「それはうとHコスちゃん。あそこにはちをじつと見てる奴がいるんだが」

これである。

実は一人が商店街に入る前から後方からなにやら視線を感じるのである。

害を及ぼすような嫌な感じではないからいい、と無視していたのだがあまりにも長いので一人もつぶざりしていたのだ。

「ううなんですよ……。なにやら商店街に入るうつと前からついてきてるよ……」

「本当か? 言つてくれればふちのめしてくるぜ?」

「いや、いいんです。襲い掛かつてきうつもないですし、放つておけばいいですよ」

「ううか……。ならいいが」

そういつてエンガルドは腕を組んでうーん、と唸つてしまつ。

「まあううこいつです。じゃあまた」

「ん、おお。またなエリスちゃん。ワタルつつたか、エリスちゃんのことよろしくな！」

「分かつてますつて

渡はエンガルドに背中をばしばし叩かれながらその場を後ににする。後ろの気配も移動しているよつなのでまだまだついてきそうだ。一人は揃つてため息をひとつこぼすのだった。

／＼＼＼＼

二人は商店街を抜けて居住区に入った。

周りからは子どもの遊ぶ声や井戸端会議をする奥様方がちらほらと見える。

平和な光景をしばらく一人で眺めていたのだが、そこに静寂を破るもののが現れた。

「エリスさん！ ワタルさん！ 緊急です！」

二人は声がする後ろを振り返った。

すると隊の制服をきた青年兵士が一人に向かって走つてくる。

青年兵士は一人の前で止まると膝に手を置いてぜいぜいと息を切

らす。

「どうしたの？」

「はあっ、はあっ……ちょっとどうじゆではない緊急事態が起きました！ 二人ともすぐに戻つてくださいー！」

渡とエリスはその言葉に眉をひそめたがとうあえず緊急らしいので屋敷に戻ることにする。

「急いでくださいー！」

言われるままに走る兵士に続く一人。いつの間にか怪しい気配は消えていた。

～買い物～（後書き）

感想お待ちしております^ ^
ちなみにPCは直りましたよ
OS再インストールすることになりましたが^ ^;
;

私はペル・アルマティア。

フィンカート家の次女であり、『風の妖精』と呼ばれるエリス・フィンカート様の部下である。

エリス様とは彼女がゆりかごの時からの付き合いだ。

お互いに知らないことなど無いし、秘密にすることもなかつた。歳は離れていたが親友、いやそれ以上の付き合いをしてきたと思っている。

だがそのエリス様との友情にヒビが入るような事件が起つた。

ヤナセワタルの召還である。

あのどこの馬の骨とも知れない野郎がこの部隊にやつて来たのは確か二週間前かそこらだろう。

それなのにあの野郎は現れた瞬間といつてもいいほど短さで四番隊の副隊長となつてしまつた。

確かに一番隊の隊長とあんな戦いを繰り広げられては誰も嫌とは言えない。

言えないのだが……

「……あの野郎」

私は四番隊の兵舎の中で呟いた。

四番隊の兵舎は一部屋四人づつだ。

あまり広くはないが窮屈するほどでもない。

縦長の部屋の両脇には一段ベッドがあつて、その奥に小さなテー

ブルがひとつと椅子が4つちゃんと据え付けられている。

女性が暮らすにはあまりにも質素だが、私はこの空間が嫌いではない。

それどころかとても好きである。

それは、エリス様との思い出の場所だから。まだエリス様が隊長ではなかつた頃、この部屋には私とエリス様しかいなかつた。

毎夜一人でいろんなことを話して眠つた。

街にできたおいしい店のこと、訓練中の愚痴、たまに恋話。あの頃はよかつたな、と思い出にふける。

毎日毎日エリス様と笑つて過ごしていた。

あの頃はずつとこんな日々が続くのだと思つていた。

だが、現実とはそこまで甘くないのだ。

ある任務で隊長が戦死してしまい、当時の副隊長が隊長なつたのだがその副隊長も戦死してしまつた。

臨時で実力がトップだつたエリス様が隊長になり、そのまま正式にその椅子に座ることになつてしまつたのだ。

本当ならば同時に副隊長も決めるところだが、なんだか『召還』とかいうのだとそれどころではなく、先延ばしになつてしまつた。

そこで現れたのはあの馬の骨。

本当ならば私が座るはずだつた（もしくはガルザック）席がひょっこりでてきた馬の骨に取られてしまつた。

しかも先日の魔獣討伐遠征で別行動をとつてゐる隙にあの馬の骨はエリス様をたぶらかしやがつた。

最近のエリス様は前にはなかつた色氣がある。

そう、恋する乙女のそれと同じだ。

私にはそれが腹立たしくてならない。

何故エリス様まあのよつな馬の骨に惚れてしまったのか……。
考えれば考えるほどわからない。

そもそもあの男に良い所などあるのだろうか？

考えれば考えるほどイライラしてくる。

気がつけば枕にシワが出来るほど握り締めていた。

＼＼＼＼＼

あの忌まわしき現実を再度確認してから3日ほど経つたある日。
夕食が済んで使用者一人の女性用兵舎に向かおうとした時、真っ
暗な闇の中で何かの叫び聞いた。
私は猫人なので目と耳が常人よりも優れているのだ。
あれはあのバカ野郎の声だった。

あの野郎まさかエリス様を、と思つて振り返つてみると、四番隊
兵舎の一階にエリス様……

と、やはりあの忌まわしき「ワタル・ヤナセ」が立つていた。

一階は窓が開いているのでそこから声が聞こえたのだろうが、そのときの私にはそんなことはどうでも良かった。

私は反射的に飛び出した。

兵舎から50㍍くらい離れてしまつたがそんなものは関係ない。田代の訓練で鍛えた自慢の足を使って、兵舎までの距離を2秒で駆け抜け、そのまま階段を上つた。

階段の影に音もなく伏せ、顔だけは出して一人を見た。

あのバカが邪魔でエリス様が見えないが、泣いているらしい。飛び出しそうになつたがばれてしまつては仕方ないので耳に意識を集中させる。

「……ワタルや……待つていたんです、中々……」

その言葉でエリス様が何を言おうとしているのかは分かつた。やめてください、やめてください、と心の中で叫ぶがエリス様には届かなかつた。

そんなしどろもどろな言葉を聽いているうちにエリス様の言葉からとんでもない言葉が発せられた。

「明日……買い物……一緒に行つて……」

続いて、

「……別に構わないよ……買い物に付き合えばいいんだね？」

その時、私は感情を抑えることは出来なかつた。

しかしどうにか声を出すことだけは理性で押し込み、全てを手に集中させた。

触っている壁がミシミシ、と音を上げながら少しだけ抉れる。ひびが入ったが壁が崩れることはなさそうだった。

しばらくそうしていたが、我に返ると一人はもういなかつた。その後の会話は聞くことが出来なかつたが、一人がデートに行くという事実が分かれればそれでいい。

私は決意した。

昔は私とエリス様の専用だつた日記帳から目を離し、あえて声に出す。

「エリス様。あなたは私が守ります。あのよつな馬の骨なんか……
私が殺して差し上げます」

一つにまとめる予定だったのですが結局一つになってしまった。

なんかもつ言葉も出ません。

まあ忙しかつたつてのもあります（ネタが浮かばなかつたつてのもあります）

何というか、ごめんなさい

いつもいつも次は！と言っていますがもう正直に言います。

次は1ヶ月後かな！

ふう・・・軽ひやまつた

でも少しづつでいいのどちら見していただけるとありがたいです^；

昨日の夜はエリス様のことが気になつてまったく眠れなかつた。おかげで私の目の中にはくつきりと不眠の証拠がある。こんな状態で街の中を歩きたくはないが全てはエリス様のため。これも仕方がない。

どうにかこうにかベッドから這いおきて食堂に向かう。いつもならまだベッドの中でもどろんごとく途中だが張り込みをしなければならないので少し早く起きた。

しかし食堂は既に開いているようだ、カウンターの奥からいいにおいがする。

カウンターに据え付けてあるベルを鳴らすと奥からルポが出てきた。

「はーい、つてペルさん。今日は早いんですね」

「ちょっと用事が……」

「そうですか。今持つてきますね」

ルポはそのまま奥へ引つ込む。
カウンターに肘を付け、頬杖をつく。

考えていなかつたが二人のデートをどう妨害しようか。

あれやこれやと考えるが寝不足の頭と空腹のお腹では何も考えられない。

そうほんやりとしているうちにルポが奥からお盆を持って出てき

た。

「はーどーぞー」

笑顔と共に料理の載つたお盆を渡してくれる。
香ばしい香りが鼻をくすぐり、ほんやりとした頭いっぽいに広がる。

今日のメニューもおいしかった。
盆を受け取つて手近の席に座る。

スプーンでスープをすくいながら改めて今日の作戦を練ることにしようとした。

が、なかなかスプーンを口に運ぶ気になれない。
今日の朝食のスープは小さなサイコロ状のベーコンと香草入り。
見るからに食欲をそそるようなメニューなのだが、何故だか口に運ぶスプーンが途中で止まつてしまつのだ。

思わずため息をつく。

何故私がこんなのかと聞かれれば、それはあの馬の骨のせいだと答えるだらう。

そして今度は深くため息をついた。
すると隣から声がかかった。

「おい、お前。どうしたんだ？」

声の方を見るとそこには朝食を受け取つたガルザックが立つていた。

「ああ、あなたですか。……今日はあなたなんかと話す気分じゃないでどこかに行って下さい」

「今日は一段と冷たいな……。なんかあつたか？」

私は一度だけフン、と鼻を鳴らしてから、

「気分が悪いだけです。……あ、今日ちょっと出かけるので

と吐き捨てるように言った。

一瞬ガルザックの顔が引きつったような気がしたが、私は構わず手をひらひらさせる。

よく周りには、エリスさんがないと冷たい、と言われるのだが当然たり前だろうと思つ。

だって、エリス様以外の者には興味なんて持てないのだから。

／＼＼＼＼

その後どうにか朝食を平らげた私は屋敷の事務所に来ていた。一般的の兵士が外出するには事務局に報告して、緊急通信用のクリスタルを受け取る必要があるので。

「じゃあ暗くなる前には帰つてきてね？」

クリスタルを受け取りながら、私は子供が、と突っ込みたくなる。が、相手が80も越したおばあちゃんなのでやめておく。これでも昔はかなりのやり手だったと聞いたのだが、今やその面影すら残っていない。

屋敷のやせこいおばあちゃんなのだ。

そんなおばあちゃんに礼を言つてから屋敷の門に向かう。街に出るならば屋敷の東側の門を使うしかない。

エリス様は届出を出していよいようなのでまだ朝食をとっているあたりだろう。

そう思つているうちに門が見えてきた。

予想通り、門の傍には一人の門番しか立っていない。

私は門から少し離れた木の上に登り、身を隠した。

あらかじめ持ってきた暗い色の外套を身に付け、気配を消して一人を待つ。

木の上で身を隠しながらふと思つ。

(エリス様に好きな人が出来るのは実はいいことなのではないか? . . .)

頭にぽん、と出てきた問い合わせたがすぐに頭を振つて考え方を訂正する。

(あのような後から入つてきて横取りするような輩にはエリス様など似合わぬ! . . .)

しかしながら別の考えが出てくる。

(私が思う奴とエリス様が思う奴は違う. . . .)

そこに至つて私は自分の行動を思い返してみた。

今まで憎たらしくて仕方がなかつた奴だが、それは私の視点からのもの。

エリス様の隣、と言つ席を取られた腹いせをしたいだけなのでは
ないか？

そこまで行き着いたところで私は我に返つた。

ふるふると頭を振つて今の考えを全て振り払つた。

これから奴を尾行するのにこんな思考で臨んだらいけない。

自分で自分に小さく渴を入れ、改めて門を見る。

するといつの間にやら既にエリス様と奴が到着していた。
どこかもつと近くに移動しようとしたが門の周りには隠れる場所
がない。

仕方がないのでこのまま木の上に潜むことにした。
しばらく見ていると二人に変化があった。

いきなりエリス様が奴の手を握り連れ去つたのだ。

突然の出来事にしばらく啞然としていたがすぐに気を取り直す。

（よし……尾行開始です）

二人は南商に来ていた。

はじめはぎこちなく歩いていたエリス様も時間が経つにつれてだんだんいつもの調子に戻っていた。

そんな二人を街の人々は少し遠巻きに見ている。

いつものエリス様ならすれ違う人々全てに声をかけられ、愛されていた存在だ。

恐らく今のこの状態を作っているのは奴だろう。

奴があまりにも浮いた存在だからエリス様もとばっかりを受けているに違いないのだ。

そう思つているとエリス様は脇の魚屋と話し始めた。

なんとこれでまだ4人目である。

この街に入つて話した人数が4人とはなんと悲しいものなのか！三人を見てぐぬぬ、と唸つていたがふいに三人がこちらを見た気がした。

慌てて物陰に身を潜めるが、心臓が飛び出るかと思つた。

ここまでどうにかばれずに尾行できているはずだ。

しばらくしてまた三人を覗いてみるとちょうど別れたところらしい。

いそいで二人を追つことにした。

商店街を抜け、居住区に入ると先ほどの喧騒から一転、しづかに小鳥のさえずりさえ聞こえるほど静かになつた。

エリス様はどこまで行くのか、と不安になつていたところで懐に入れていた通信用クリスタルがブーン、と鳴つた。

何事か、と取り出しどみると紫色のクリスタルが静かに点滅している。クリスタルに魔力を流してやると先ほどのおばあちゃんの声が響いた。が、

「おら！ 休日を堪能してやがる野郎ども！！ 今すぐ帰つて来い！ 30秒以内だ！！ 戦……戦がはじまるよほおおおおおおおお！！」

！？

何だこれは！

声はたしかにあの婆さんの声なのだが、こんなに若々しいというか激しい人だつただろうか。

昔はやつ手だったところ、昔の血が騒いだのだろうか、と勝手に想像する。

それよりも戦と並んで単語のせつが氣になる。

いつたい何があったのだろうか。

エリス様のことも気になるが先ほどの通信、婆さんも含めて氣になる。

それに帰還命令には違いない。

仕方がないので屋敷に帰ることにした。

気がつかれないようにそろそろとその場を離れ、屋敷への帰途に着いた。

これで幕間的な話は一旦終わりになります。
次はしつかり本編に戻りますので！

～異変～（前書き）

はい、予定より一週間も遅れてしまいました。

一週間遅れた + 一ヶ月はとても遅れないと自覚しております。

本当はもちつとはやく投稿できると思ったんですが見直していたら修正が止まらなくなりまして・・・。

しかも文章的にはまだまだ、といつこの未熟さ。

自覚していくもどうにも出来ないのはやっぱり力が足りない性だらうと思っています。

次話も頑張っていきます！

走る兵士を追いかけ、屋敷への最短距離を駆け抜けた渡たちは今朝出た門に到着した。

三人とも息を切らしつつも門から奥の屋敷を覗いてみると、すると、今朝はいつものんびりとした風景があつたのに対し、多くの兵士がばたばたとそこらじゅうを駆け回っていた。そしてその兵士たちの顔には焦りと不安が色濃く映っていた。

「はあ……いつたい何があつたんです？」

エリスが屋敷を見て兵士に聞いた。

「いや、これから説明されると思いますので姫のところに行つてください。場所は会議室です。そちらに行つたほうがより詳しく分かるかと……」

「この兵士もそつとう焦つているらしくかなり早口だつた。そこまで聞き取るとエリスは屋敷へ真っ先に駆け出した。渡もエリスに続き、全力で追う。

屋敷の正面玄関をくぐり、ざわめく屋敷内を走り抜ける。

すると一階の一一番奥、『大会議室』とプレートが下げられた部屋にたどり着いた。

エリスは年季の入つた扉をスピードを落とすことなく勢い良く開ける。

中には大きな円卓と椅子、数人程の人気が集まっていた。

ミーシャやデニークの姿も見えたのと同じにいるのはじつやら隊長・副隊長格らしい。

上座にはシルビア。円卓には既にここにこる全員が椅子に座っていた。

「おお、来たか一人とも。まあそこに座れ」

シルビアは円卓の空いている席を指した。

一人は切らした息を整えつつゆっくりと座る。

「さて、全員揃つたので説明する。……まあ各自大体のことは聞いてはいるだらうがな」

シルビアはそつと立ち上がり、腕を組んでこいつ言った。

「隣国であるエルギス帝国が我が国に侵攻してきた」

周りの一団は事前に聞いていたらしく揃つてその言葉に顔をしかめる。

エリスは予想外のことだつたようすで、驚いて口をぽかんと開けている。

だが、

（えるきすつて……何？）

渡だけ蚊帳の外だつた。

シルビアも渡が困惑しているのに気が付いたようだ、

「ああ、ワタルにはこの後でちゃんと教えてやるから今は黙つてろ。な？」

と、渡を制した。

シリビアは「ほん、と咳をすると

「ここがエルギスとの国境に一番近い都市だ。拠点になることは間違いない」

シリビアはそこで一回間を置き、全員の顔を見渡す。

「だが今の時点で分かっているのは何一つない。これからのことも検討しなければならないが、それはまた後で話そう。今日はこれで解散だ」

シリビアがそう言つと渡とHリスを除く全員が立ち上がり、足早に部屋を出て行つた。

さつきまで静かだつた部屋がさりにシーン、と静まり返る。少しだけ腕を組んで悩んでいたシリビアだつたが黒板に何やら書き始めた。

「じゃあこれからワタルに説明してやる。Hリスはどうする？ 暫だぞ？」

シリビアが黒板を向いたまま背中越しに聞いていた。エリスは、

「えつと……私もよく状況が読めないので聞いていいですか？」

「ああ、構わん。まあそのことについては後半になるだろ？がな」

と、シルビアは言つと同時に黒板から一人に向き直る。黒板にはお椀を横から見たような絵が描かれていた。

「ではまずワタルにはこの世界のことについて説明してやる。何回も言つのは面倒だから呪へ聞けよ?」

渡はこれから何が始まるのかやつと分かつたらしく、口へ口へと頷く。

「これが、私達が住む大陸『オルメルス』だ。この大陸は大体こんな形をしている」

そう言つてシルビアはお椀をこんこん、と叩いた。

「おぬめるす?」

「オルメルス」

シルビアはまた黒板を向いて何か描き始めた。

「んで、この大陸の真ん中あたりから北の海岸まで連なるのがアルザ山脈。口には空でも飛ばない限り乗り越えることは誰にもできん。北の端つには通れるがな」

シルビアはお椀の真ん中から太い線を上までくねくね引いていく。

「口の山脈の一番南のところから左下の方に流れてるのが、ヴィネジャ運河」

そしてシルビアは山脈の南端からさらに左下に線を引く。それは

他の川と合流しながらだんだん太くなつていった。

「まあ大体こんなものかな。河の反対側に湿地があつたりするんだが説明するの面倒だからいいや」

「適当だなおー……」

その言葉に、説明に聞き入つていた渡は思わず突っ込む。シルビアは渡の言葉にムツときたらしく、

「うーちは無知なお前にわざわざ子ビもでも知つているよつな知識を教えてやつているんだ。ありがたく思え」

と、口を尖らせた。

「はーはー、ありがとう」やれこますお嬢様

「お嬢様じゃなくて姫様だ、私は」

(そこに突っ込むのかよー)

渡はまた突っ込んでしまつになつたが、さらに話を大きくしても面倒なのでぐつと心の中に押さえ込んだ。

少しの硬直の後に渡は息を整えてから言つた。

「俺が悪かつたから差年二三點。それで、続きは?」

シルビアも一度咳き込んでから氣を取り直して続ける。

「ええと、この大陸をちょうど真ん中から二等分したうちの左上が

私達のいるアルスファイア連合王国。十数の国が集まつて出来ている。下が同盟国であるカラスタ連邦。んで右上が問題になつているエルギス帝国」

「ちょっと待つた。三つだけつて寂しそぎないか？」

「いや、アルザ山脈の北の延長線上に島があつてな、イザナギ皇国といつ

「それを合わせたつて4つじゃんか……」

シルビアの言葉に少なからず肩を落とす渡。

異世界に来たからにはもつとすごいものを期待していたのだ。

しかし聞いてみたら元の世界よりもあつけなかつた。

「まあ世の中そんなもんだ。それで帝国のことだが……おい、エリス」

シルビアが本題に入ろうとしてエリスに顔を向けると、机に突つ伏したまま規則正しく寝息を立てるエリスがいた。

流石に今までの話は退屈だつたらしい。

シルビアは無言でエリスの背後に回り、

「起きろ」

ぱーん、とエリスの頭を叩いた。

「ふにゅつ？」

突然のことに驚きつつも顔を上げるエリス。

状況が掴めていないようで、せよせよ周囲を見ながらぽつりと呟いた。

「……食後の『ザート』を

「ばかやうひ」

シルビアは反射的に再びエリスの頭を叩く。
その一撃でエリスは完全に覚醒し、背筋を伸ばした。

「あっ、はい。『めんなさい』……」

「つむ、分かねばよろしく」

エリスはしゅん、としつつも謝り、シルビアはそれに頷いた。
シルビアは黒板に回り、再度説明を開始する。

「んで、『Jの帝国』が我が国に攻め入ってきたんだ」

「やつ、それですよ。なんですか？」

エリスが率直に聞くが、シルビアはつーん、と腕を組んで黙り込む。
数秒間悩んでからシルビアは口を開いた。

「それがな、全く分からなんだ。別に仲がそこまで良かつたわけ
ではないが戦争をふつかけるほど悪かった訳でもないし。それに奴
らにメリットがない」

「ですよね。一国を同時に相手するなんて。何か裏があるんでしょ

「うか

渡はエリスの言葉に眉に皺をよせた。

「ちよつと待つて。一国同時についでいる」と、その何とか帝国はもうどいかと戦争してゐるのか?」

その問い合わせシルビアが答えた。
また黒板を指しつつ、

「ああ、帝国は我が国の同盟国であるカラスター連邦と戦争状態にある」

「じやあこの王国と帝国は戦争してなかつたのか? 同盟国が戦争してゐる相手なのに?」

「我が国はカラスターを支援してはいたがエルギスとは戦争はしておらん。それなりに危ない状態ではあつたがな」

「だつたらなんで……」

「それが分かつたら苦労せん」

シルビアはそこまで言つと、ため息をつきながら椅子に座つた。
田を瞑つて腕を組み、黙り込んでしまう。

会議室はシーンと静まり返り、渡は小さな声でエリスに呟く。

「でもやつぱり戦争をふつかけるつて事は何か理由があるんだよな

」
エリスもその声に小さく答える。

「だと思いますよ。さつきも言いましたがエルギスとカラスタは戦争をしています。昔から、という訳ではありませんが十年くらいは戦争をしていますから、物資的にも危うい状態だと思いますが」

エリスも困惑しているようで、中々考えが纏まらない。そしてエリスも視線を机に落として考え込んでしまった。

「ぼつーん、と一人残された渡。

二人に習つて机をじつと見てみたが、恐らく一つの木を切り出したのだろうと予想される大きな円卓にはきれいな木目があるだけだった。

居所が悪そうに周りをきょろきょろしていたが、シルビアが思い出しそうに言った。

「ああ、そういえば一人に任務があつた」

その言葉に渡とエリスは顔を上げてシルビアを見る。

「一人仲間がエルギスの牢屋に捕まつていてな。一人に連れ戻してきて欲しいのだ」

二人はその言葉に揃つて首をかしげる。

「名前はロベルツ・ヴァリアック。軍師だ」

エリスはシルビアの言葉を聞いて顔をほころばせる。

「えつと……ロベルツ叔父さんですか……？」

「ああ、そのロベルツだ。エルギスを旅行中に捕まつたらしてな。

まあエルギスには素性は知られていないだろうし、ただの旅行中の親父を捕まえたって感じだろ？

「その人はいつたい何をやらかして捕まつたんだ？」

「食い逃げだ」

「食い逃げ！？」

「旅行中に金が尽きたらしくてな。どうしようもなくなつて捕まつたらしい。本人曰く、牢屋ならば衣食住に困らないからわざと捕まつたのだー、とか何とか言つていたけどな」

シルビアはそこまで言つとまた深くため息をついた。

「まあいざとなれば使える奴だ。ちょいと行つて脱獄させてこい」

「んな無茶いうなよ！」

「大丈夫だ。あいつも味方がいれば脱獄なんて簡単にやつてのける奴だ。いけ好かない奴だが実力があるのも事実だしな。放つておきたいが無視できない状況になりつつある。時間をかけてもいいからなんとしてでも連れて来い」

シルビアはさうこさうこため息をついてポツリと呟いた。

「我々もあいつに力を借りなければいけないほど無力なものなのかな

……

渡は状況は掴めないがその軍師の実力と性格は掴んだ。

そして直感する。

絶対に面倒くさい。

しかし戦いになつてもまだまだ役に立てないであろう。

そんな自分が一番役に立つためにはこの任務を成功させるしかない。

渡はそう決意した。

「ちょっと待つてください。叔父さんとはどうやって連絡をとったんですか？」

ヒリスが心配そうにシルビアに尋ねる。

「ああ、あいつから屋敷宛にな、魔道具を使って連絡してきたんだ。あいつが作った、地中の魔力線を使って一方的に文章だの音声だの映像だのを送る装置らしいくてな。優れものだったがそれっきり音沙汰無しだ。とりあげられたんじゃないか？」

「のんきだなあおい……」

しかし問題はその装置ではなくロベルツ本人である。

「で、その軍師さんはどこにいるんだ？」

「ああ、エルギス帝国の北東の街、レグスだ。地図をやるからそれで調べる」

「どうやって行くんだ？」

「そのまま歩いていったら捕まるに決まっているからな、船で行つてもうう。しかもそのままじゃなくイザナギ皇国を間に挟んで、だ

「なんでそんなに面倒くさい方法で行くんだよ？」

渡は率直に聞いたが、シルビアはあきれて首を横に振った。

「そのまま我が國の船で行つたらばれるに決まつてゐるだろ。それにあちらの街まで行くには距離がありすぎて食料やら何やらが取れるかもしれん。念のためつてやつだ」

「でも何で私達なんですか？他の人じゃあ……」

「あいつがエリスがちょっと必要だ、と言つていたのでな。なんかあるんじゃないか？ワタルについては一人でいても邪魔だから世界を見て勉強して来いつて感じだ」

「そんな露骨に言わなくたつていいだろ……」

シルビアはそんな渡に目もくれず、さらに付け足した。

「ああ、それとお前らはイザナギ皇國への貨物船に便乗して向かい、そこからまた船でエルギスの港町であるレントに行へことになる。船酔いに気をつけていけ」

渡は精神的な傷に耐えつつもしつかりと頷き、エリスも了解した。

「よし、出発は早い方がいいからな。明日明朝。こちらの準備は出来ているからお前らも支度をして来い。これにて解散

「あつがとうございました」

ヒリスはぴょこんと頭を下げ、渡も椅子から立ち上がり会議室から出よひとする。

しかしシルビアから声がかかった。

「あ、ヒリスにちよひと言ひ事があった。渡は先に行つていくれ」

渡はその言葉を聞いて一人で会議室の扉を開ける。

会議室の外はまだ明るかつたが、さつきよりも日が傾き、心なし
か空も茜色に染まりつつある。

そんな廊下を歩きつつ、渡は少しだけ見知らぬ場所へ、旅行気分
で胸を膨らませるのだった。

~~~~~

「さて、ヒリス。私が何故お前とワタルにこの任務を命じたか分か  
るか?」

一人きりになつた会議室。

シルビアは頬に手を付いてぼそつと切り出した。

「えつと……やつを言つてたじやないですか」

シルビアはエリスの言葉に心の底からため息を付き、エリスの鈍感さを嘆いた。

だがシルビアはそんなエリスが好きだし、応援してやりたいと思っている。

「お前、ワタルのことが好きだろ？」

エリスは突然のことに驚き、むせる。そして真っ赤な顔で反論した。

「んなつ、そつそんな訳無いじゃないですか！」

「だつて、屋敷中で噂してるだ。エリスはワタルに恋をしているとか、付き合っているとか、もつやつてしまつたとかやつてしまつたとかやつてしまつたとか」

「そんなことはありません！ 何ですかやつてしまつたって……！」

「私が言つてはいるわけではないぞ。屋敷の奴らが言つてはいるだけだ」

「黙らせてくれます……」

がたつと椅子を立ち、会議室を出ようとするエリス。

普段はおとなしいエリスだが、今は照れとも怒りとも焦りとも似つかない表情である。

しかしシルビアはそんなエリスの心情を読み取つてはいるかのように落ち着いて話しかけた。

「まあまで、エリス。だが、お前がワタルが好きなのは事実だろ？」

？」

エリスはその言葉に敏感に反応したが椅子にすとんと座ると、小さく頷いた。

シルビアは満足そうに頷くと、身を乗り出して秘密の話をするかのように小さな声で話しかけた。

「だからな、私はお前達を応援してやるつと思つたのだ」

「お、応援……ですか？」

「そうだ。ちなみに今回お前達はエルギスのレグスまで言つてくるわけだが、結構な長旅になるだろ？ そこでだ、お前はその間にワタルを……」

「えやーーー！」

エリスは脳の許容範囲を超えたから机に「 Gon 」、と頭をぶつけた。そして耳を押さえてぶつぶつと何やら呟きはじめる。

端から見たら不気味に思つよつた光景である。

そんなエリスにシルビアはまた落ち着いて話しかける。

「まだ最後まで言つてないぞ。……だが言いたいことは分かるだろ？ 帰りだつてロベルツは空氣の読める奴だから氣を遣つてくれるはずだ。心配事は何もない！ ああいけエリス！ お前の明日がかつているんだぞ！ ！」

シルビアも訳の分からぬことを宣言し、まだ耳を塞いでいるが黙りこんだエリスを指差した。

「エリス！ お前がそんなんでどうする！ お前も中々鈍感だが奴の方がもうと鈍感だ。お前がアプローチしてやらねばお前達の明るい未来は開かれんぞ！」

エリスはその言葉を聞いて、静止する。

シルビアもエリスを指差したまま止まり、会議室の空気が止まった。

そのまま数秒してから動いたのはエリスだった。

ゆっくりと立ち上がり、落ち着いてシルビアを見る。

そしてエリスも宣言した。

「私……やります」

シルビアは静かな、だが熱いエリスの心を確認し、満足そうに頷く。

そして笑顔を見せてエリスに言った。

「私に出来るのはここまでだ。後はお前次第。頑張れよ」

「はい！」

今ここに少女の静かな誓いが刻まれたのだった。

## ～異変～（後書き）

これを書いていて思いました。

（国とか大陸とかの形想像しにくくね？）

なのでここに簡単に説明していきたいと思います（本当なら文章中だけで分かるような文章を書ければいいのですが・・・）

簡単に言えば

120度（角度）で円を二等分にした感じです。  
そして円を茶碗に見立ててください  
でもって上方にニュージーランドとかイギリスみたいなあまり大きくない島があります

想像できましたか？

それでも分からんわボケ！と書つ方は感想コーナーに送つてください。

頑張つて次を考えておきまーす。

次の話は異国に出発するところです！  
お楽しみに～

～出発～（前書き）

長くなつたので二つに分けました  
本日中にもう一つは投稿するつもりです

～出発～

「仕度は出来ましたか？」

「うーん、もうちょっとかな……」

「早く出発しないと港の貨物便に間に合いませんよ」

「分かってるよ母さん……」

「だつ誰が母さんですか！」

（――）

翌朝。

太陽が昇るか昇らないか、といつほど朝早く、普段着だけでは流石に肌寒い。

渡、エリス、シルビアの三人は屋敷の門の前で馬車を待っていた。昨日の街に出た門とは逆の方向である。

既に渡とエリスは旅の為の仕度を済ませており、一人の隣には革をなめして作つた大きな鞄が置かれていた。

「さて、そろそろ来ると思つが……準備はいいか？」

口を開いたのはシルビア。彼女は一戸一戸と一人を見ているが、その笑顔が渡には違和感が感じられた。

「なあシルビア。なんでそんなににやにやしてんんだ？」

「にやにやだと？ そんな気持ち悪い笑顔ではない。私は一人の無事を願つてだな……」

と、腰に手を当ててシルビアは露骨にため息をついた。しかし渡にとつてもエリスにとつても見送つてもう、というのは悪い気はしない。

しかしエリスはこの状況に少しだけ違和感を感じていた。

「あの、四番隊の皆はなんで来ないんですか？」

それはもつともな質問だらう。

エリスは幼くて小さいが、こんなでも一応隊長である。彼女を見送るというのは誰が考へても当たり前だらう。別にエリスは自惚れているつもりはないが、少し氣に掛かったのだ。

それは渡も薄々感じてはいた。

あの、エリスを愛するあの人人が来ない筈がない、と。

その問にはシルビアがあつさりと答えた。

「ああ、だつて言つてないからな」

その答えに一人は啞然とした。

「だつて、あいつ等に言つたら面倒になりそつだつたからな。といつても若干一名くらいだが」

その言葉を聞いて渡はシルビアに深々と頭を下げた。命を落とすくらいなら頭を下げた方が全然ましだ。

しかしエリスは困つた顔をしながらボソリと言つた。

「やめてペルには何か言つておかなきや……。あの子、ああ見えて結構寂しがりやなので」

「やめておけ。死人が出るぞ」「ごめん。俺死にたくない」

シルビアと渡の言葉が見事に重なり、エリスをやんわりと否定する。

それを聞いてエリスはそれなりに傷を負つたようだつたが、負けじと反論する。

「で、でもそれくらいあの子が怒るわけありませんよー。」

「お、もう馬車来たんじゃないか? ほら、あれ」

シルビアはエリスの言葉を完全にスルーし、無理矢理話題を変える。

エリスはさらに何かを言おうとしていたが、すぐに諦めて軽くため息をついた。

渡はエリスに対して申し訳なさそうにジェスチャーで謝つていた。

シルビアが指を指した先には、道をぱかぱかと音を立てながらやつてくる馬車が遠くに見えた。

馬車といつても馬が引いている荷台に幌がついただけのもので、遠くから見ても分かるほど老いた老人が御車台に乗っている。しかも荷台には樽や木箱が満載で、馬も大変そうだ。  
見たところ荷台には一人が乗るスペースは無いようだ。

「あの、姫。私たちはあれのどに乗るんですか？」

エリスが恐る恐るたずねると、シルビアは当然のよつと囁いた。

「お前らが馬車に乗るわけないだろ。アレの手伝いをしながら港まで行つてくれ」

シルビアの予想外の答えに驚く渡とエリス。  
三人の間をひゅうと風が流れ、シルビアとエリスの髪が乱れる。  
シルビアは自分の髪を右手で抑えつつ口を開く。

「私は馬車に乗ると言つた覚えは全くないぞ」

「紛らわしいんだよー！」

渡はシルビアに間髪いれず突つ込み、三人の時はよつやく動き出した。

シルビアはやれやれ、とまたため息をつく。

しかしエリスはあくまで冷静に聞いた。

「でも、あれを手伝つてどこを手伝えばいいんですか？」

「いや、あの馬車じゃなくてあの老人を手伝ってやれってことだ。  
……おーーー！」

シルビアはそつと指をパチン、と鳴らす。

するとどこのからともなく一人のメイドが馬車よりも一回り小さな荷車を引いてやってきた。

突然やってきたメイドたちは渡とエリスは目を丸くしていたが、メイドたちはお構いなしのようだ。

荷車には馬車に載っていたような木箱やら何やらが沢山積んであった。その荷車を、重量を感じさせないような動作でシルビアの後ろに止める。

メイドたちは役目を終えると一礼してから音も無く立ち去ってしまった。

突然の出来事に対処しきれない渡とエリスだが、渡が何とか声を出す。

「えと……！ れを……？」

「運んでくれ。港までな」

その言葉に驚いたのはエリス。若干顔が引きつっている。エリスだけでなく渡も顔に驚愕の色を浮かべている。

「港までって、一体どうやって歩けばいいんですか……？」

「んー、まあ急げば昼を過ぎたあたりには着くんじゃないか？」

「十分長いよ！」

再びシルビアにつっこむ渡。

しかしどう反論しても敵わないと見て、渡とエリスは反論を止め  
る。

そういってこの間に馬車に乗った老人はすぐそこまで近づいて  
いた。

ここまで来ると老人の輪郭がはっきりと見えてくる。

農民風の服に立派なひげをたくわえた顔、老いながらもしゃん、  
と背筋を伸ばして座つているところを見るとまだまだ衰えてはいな  
いことが分かる。

太い指で手綱を握り、しょぼしょぼとした目でしつかりと前を見  
据えている。

その老人は三人に気が付くと手を挙げて挨拶してくれる。

シルビアは手を挙げて返したが、渡とエリスは無意識に頭を下げ  
てしまう。

それからシルビアは歩いて馬車に近づき、老人と何やら話しかけ  
る。

すると老人は馬車から降りて恭しくシルビアに一礼する。  
渡とエリスはシルビアに続いて近づき、老人に挨拶する。

「おはようございます」

老人は一人に気が付き、同じように挨拶をした。

「ああ、お早う。えーと……」

「俺は柳瀬渡といいます。渡のほうが名前です」

渡は緊張しながらも老人に自己紹介。

「ほほう、君が例の……。そちらはエリスちゃんだったかな？」

「あ、はい。エリス・ワインカートといいます。……すみませんが、どこかでお会いしたことがありますか……？」

「ああ、そうだったな。君がまだもつと小さい時だったから、覚えてないだろうな。娘が立つたと君の父上が大騒ぎしてね、呼び出された時に初めて君を見たんだ。なるほど、君の母上に良く似ている」

老人は顎をさすりながら目を細めて昔話を始める。

渡とエリスはその様子に戸惑いながらも老人の言つことに頷くしかない。

それに見かねたシルビアが一人に助け舟を出した。

「おい、自己紹介もまだなのに昔話を始めるな。一人が困っているだろう」

老人はシルビアに言われて恥ずかしそうに頭をかいた。それから改まったように真面目な顔になつて話す。

「おおつと、これは大変失礼した。私の名はマホック・ヴェルゲイン。見ての通り今は街と港を行ったりきたりしている」

それを聞いたエリスは目を丸くして老人、マホックを見た。しかし渡には何のことなのか全く分からぬ。

エリスはそのままマホックを指差したまま口をパクパクとさせて

いたが、シルビアがエリスの代弁をするかのように再び口を開いた。

「私のおじいさま、先代国王の右腕として活躍した『元』將軍マホック・ヴェルゲインだよ」

シルビアの一言で渡とエリスは口をあんぐりと開け、信じられないような目でマホックを見る。

しかし当のシルビアは本当に面倒くさそうにため息をつき、パンパン、と手を叩いた。

「さて、じいいら辺にしておかないとあっちに着く頃には日が暮れてしまう。そろそろ行け」

その言葉に硬直していた二人は、はっと気が付いて会話を中断する。

そして渡とエリスは鞄を持ち直して、荷車に向かった。一人は荷車の上に鞄を置く。渡が荷車の前に立つて取つ手を掴んで引こうとする。

が、

「なつなんだこれー、びくともしないぞー！」

「結構重いからな。まあ行きは平坦な道だから、そんなに苦労することはないだろ？。動き出せばそのままいけるぞ！」

「その『動き出し』ができねえんだよー！」

「その為に一人いるんだろうが。エリスも手伝つてやれ」

「あ、はい」

エリスも後ろから荷車を押す。しかし一人がかりでも荷車は動かない。

「あれ、おかしいな？ 四番隊の隊長と副隊長はこの程度の奴らだつたのか？」

「うつさいわ！ お前も手伝いやがれ！」

シルビアはふむ、と顎に手を当てて少しだけ考えたが、何も言わずにエリスの隣に近づいた。

そしてドレスであるにもかかわらず、荷車をガンーと蹴飛ばした。すると、

「うわっ！」「あやっ……」

荷車は弾かれた様に動き出し、車輪はがらがらと音を立てて回りだした。

渡とエリスは危うく転びそうになつたが、何とか足を動かしてそれを回避する。

そして渡は勢いが付いた荷車のスピードを落とさないこようにしながら、後ろを向いて叫ぶ。

「うのやわっ！ もう少し一寧にしやがれ！」

「手伝えとこつたのはお前だつが……まあせいぜい頑張つて来い」

シルビアはそのまま一人に向かつてひらひらと手を振る。それにはエリスが答え、片手でシルビアに手を振り返す。

だんだんと小さくなつていく影を感慨深げにシルビアは見つめながら、ため息を一つついて屋敷に戻りつと足を動かしかけた時。

「若さとはいいものですね」

背後からいきなり声が掛かった。

「うわー……なんだマホックか。お前まだ行つてなかつたのか？ とこつよつ行かないのか？ いや、早く避け

「まつほつほ。相変わらず姫は辛口ですな。心配せずとも老い先短いですわい。それよりも……」

マホックはそこで一寸言葉を切り、馬車に乗りながり言つた。

「ルリ一は元氣にしておりますかな？」

シルビアはその言葉に何か思つところがあつたのか、マホックから視線を逸らして少し考える。

数秒ほどの時が流れ、沈黙の空気が一人を包んだ。それから再びマホックをしっかりと見てから言つた。

「ああ。相変わらず、だ

「ううですか……。ではルリ一よひじへおこておこてはくれませぬか？」

「ふむ。それくらいならまあいいだろ。……それよりも早く行かなこと一人とはぐれるだ

「まつまつま。確かにそつですな。でもよろしくお願ひします」

マホックは馬車の上から頭を下げ、握つてこる手綱で馬をひじりと呪へ。

シルベアはその影もさへなるまい見てから、一いつめ馬をつき、今度こそ屋敷に帰つてこつた。

～港町～（前書き）

なんだかやるやる詐欺で訴えられそうですね  
今日中ことこいつてねえながらできてないし、また話が長くなつて分  
けぬし・・・

「マホックさん遅いですね」

「シルビアと話したから、何か忙いことでもあつたんじゃないかな？」

一方渡とエリスは順調に港町を田舎していた。

が、マホックがいつまで経っても来ないので心配していたのである。そのため一人は、少しだけ歩くスピードを落として荷車を引いていた。

ちらちらと、エリスは後ろをみながら渡に言つ。

「それにしても遅いですよ。何かあつたんじゃないですか？」

「うーん、でもこれを一回止めたらいまつ動かせないしなあ

渡とエリスはあれやこれやと言しながらくつと道を進んでいく。

これまでの道はシルビアが言ったように平坦で、のぼりも下りも無く歩きやすかった。

しかし両脇は背の高い木が乱立し、これだけまっすぐな道を進んでいると、なんだか気がおかしくなりそうだ。ちなみにまだ分かれ道を一回しか曲がっておらず、それ以外はずっと直線の道だ。

一人は頑張って荷車を押しながらも、何もないまっすぐな道という苦行に耐え、さらに後ろも氣をつけるという何とも神経を使う作

業をかれこれ一時間ほど続けていた。

がらがら、という音をずっと聞き続け、永遠とも思われる道をただ歩く。

同じことをただただ繰り返すというのは人にとっては十分拷問と言えるだろう。

一人の会話は自然と減り、その沈黙がさらに疲労を呼び、疲労で会話が減る。

このサイクルが十回ほど一人の中を回った時、ついに変化が訪れた。

「おーい、二人ともー」

一人は待ち望んでいたように後ろを振り向くと、遠くにマホックの馬車の姿が見えた。

しかし二人の目はすぐに驚愕に丸くなる。

マホックが近づいている。

それも、

猛スピードで近づいてくる。

明らかに馬では出せないようなスピードだ。というか馬は足を動かしていない。

まるで滑るように猛スピードで近づく馬車は、一人にとつて信じられないもの、としか目に映らなかつた。

二人は危うく足を止めそうになり、しかし我に返つてなんとか足を動かす。

そうこうしている内にマホックの馬車は音も無く一人の荷車の隣に付き、スピードをあわせる。

遅れてやつてきた風が三人の間を通り、木々を揺らしながら抜けていった。

マホックの馬は足を動かしだし、馬車の車輪もがたごと回りだした。

その様子に一人は、ただ足を動かし、目を丸くして隣の馬車を見るしかない。

「魔法だよ。結構疲れるがね」

一人の様子を見てか、マホックが一人に説明した。しかし一人にその言葉が届いたかどうかは良く分からぬ。マホックはそれに構わず続けた。

「ちょっと用を足していくのでな。一人は優しいから私のことを待つていてると思ったから、知らせてからにしようと思ったんだ。私は遅れるから先に行つてくれ」

渡とエリスはその言葉にただ頷くと、前を見てスピードを上げて歩き出した。

終始口を開かなかつた二人に、マホックは微笑み、馬車を止める。それから木の陰に向かつて、陰から一人の様子を観察する。

「……行こうか」

「……はい」

渡とエリスは肉体的な疲労とは別の疲労を顔に浮かべ、一路港を目指すのだった。

それを遠くから見ていたマホックは、用を足す」と無く無表情で馬車に近づく。

それから渡達が曲がり角を曲がり、完全に見えなくなるまで一人の荷車を見つめ続けた。

一人の姿が完全に見えなくなると、馬車の車輪の脇にしゃがんで、

「君、何してるんだい？」

ボソリと呟いた。

すると、馬車の下から金髪の少女がぼとっと落ちて、そのまま土下座の格好になる。

その少女は金髪を団子のようになじんで結んでおり、馬車の下に隠れていたため泥だらけになってしまっている。

その少女は……

「将軍の馬車に張り付いていた非礼、誠に申し訳ありません！ 斬られる覚悟は出来ております！」

ペルだつた。

彼女は馬車が屋敷に着いてからずっと、馬車の下に潜んでいたのだ。

「まあ待ちなさい……。まず君の名前を教えてもらおうか

「はい！四番隊所属、ペル・アルマティアでござります！」

「ふむ、四番隊の……。それにアルマティア家といえばそれなりに名門じゃないか。何でこんなことしたんだい？」

するとペルは一瞬置いてから言った。

「一言……。エリス様に一言……別れを」

「別れだなんて・・・、任務は良く知らないが終わつたら帰つてくるだろう。そんな一生の別れみたいな言い方をしなくてもいいんじゃないかい？」

「いえ、別れであります！再会しても、今度会うときにエリス様の心には私はいないかもしません」

マホツクはその言葉に何か思うところがあつたのだろう。途中から言い終わった後には泣き崩れてしまった少女の肩にぽん、と手をのせていった。

ペルは信じられないような目でマホックを見た。無理もないだろう。元將軍の馬車に忍び込んだ時点で見つかった時の死は覚悟していたのだから。

ペルは上げて いた頭を再び地面にこけて、涙ながらに目の前の老人に深い感謝を表すのだった。

「やつと着いた」「

暫らくして、渡とエリスは潮の香りがする港町に着いたのだった。時刻は昼を過ぎた頃。季節が夏ではないため太陽が真上にくることはないが、ほんのすこしだけ口が傾いているのが分かる。あたりにはカモメやらうみねこやら、多くの水鳥が飛び交い、メロディを作っている。

渡達がいる街の入り口は高台になつてゐるらしく、眼下には大小さまざま船が大きな海原への出港を待つてゐるかのように停められていた。

渡とエリスの一人は少しだけ下り坂になつてゐるところに荷車を止めると、潮の香りをいっぱいに吸つて水平線に目を細くして見つめる。

少しの曲線を描いた水平線に対岸は見えないが、この先にこれから行くであろう異国之地が待つてゐるのだろう。

そう思つとこれまでの疲れを忘れて気持ちがわくわくしてくる。

一人は無言で密かに心躍らせていたが、いつまでもいりじっている訳にはいかない。

「こいつか」「

「はい」「

一人は足を動かした。

しかし、問題はすぐにやつてきた。

この港町には急勾配が多すぎるのだ。  
動かすのが難しいほど重い荷車は、支えるのも難しい。それも、  
傾斜が急になるほど大変なのだ。

そのため、二人は足をつっぱつて、ずりすりと移動することにな  
つた。これでは移動ではなく、ただ引きずられているだけだ。

「こりこれ、やつぱり重過ぎるだろ！」

そう言つたのは渡。背中をぴつたりと荷車につけて踏ん張つてい  
るが、中々難しいようだ。

「でつでも、この下にこの荷物置かなきやですよ……」

エリスも後ろから荷車を掴んで支えているが、力が足りない。

その様子を周りの人は微笑みと共に温かい目で見ていた。

この時間帯に街を歩いているのは主婦の方々で、周りにいる人の  
七割くらいはつぎはぎが目立つドレスにバスケットを持った女性ば  
かりだつた。中には子連れの女性もいて、「あれなにー?」「しつ、  
指差しちゃいけません!」等というお約束も忘れない人もいた。  
とにかく老若男女も全ての人が一人の様子を見ていた。

渡とエリスは周りの人から笑いながら見られる、という状況をとても恥ずかしく思っていたが、この状況をよい方向に打破する策は頭から浮かんでは来なかつた。

疲労の次は笑い者、という苦行に一人は耐えつつも、じりじりと少しづつ進むしかない。

しかしだんだん顔を真つ赤にして俯きながら進む一人の目の前に、転機が訪れた。

悪い方の。

一人の脇の路地から数人の子どもが勢い良く飛び出したのだ。

その子ども達は荷車の前を通つてまた別の路地に飛び込んでいく。

渡は突然目の前に現れた子どもに驚き、バランスを崩してしまつた。

そのままガタン、と動き出した荷車を一人が止められるはずも無くそのまま荷車は転がる。

渡とエリスもそれに巻き込まれ、渡は前、エリスは後ろから荷車にくつついて猛スピードで坂を駆け下りた。

「うわああああああ！」「きやああああああ！」

一人が揃つて悲鳴をあげ、当たつたら即死は免れないようなスピードを出しても周りの人間達は動じない。

それどころか落ち着いて道の真ん中を空ける。そして一人の女性が叫んだ。

「ペッソさん！出番ですよーー！」

だんだん周りの風景がゆっくり見えてきて、本気で死を覚悟し始

めた二人がゆく道の先には、一人の男性が立っていた。

線は細く、背も高い。耳は長く、肌は黒い。

その男性は木箱やらなにやらの整理をしていたが、女性の呼びかけを聞くとゆっくりと後ろを向いた。

そして動じる様子も無く何かぶつぶつと呟き始める。

「そこの人早くどいてー！」

猛スピードで駆け下りる一人にはペッソと呼ばれた男性と、その先の荷物と、さらに聳え立つように止められている大きな船しか見えていない。

あまりのスピードに涙が出てくる目を気にすることも出来ず、ただ死ぬとしか思つていなかつた渡は、やけくそ気味になつてスピードを上げた。

今まで後ろ屈みになつて回るように動かしていた足を、ただ前に動かすために動かす。

エリスは荷物を括つていた紐につかまる様にしていたため、自然と前かがみになつてしまつ。

その様子を見てか、目の前のペッソは細い目と眉をぴくりと動かし、少しだけ笑つたが咳きは止めない。

「よいよ二人とペッソの間が20メートルくらいになつた時、ペッソは両手を前に突き出した。

すると、ブンと丸い紋章のようなものが手の前に現れる。そのまま目を細めてタイミングを計る。

駆け下りる一人は目を瞑つてただただ足を動かすだけだった。

そして、ペッソの紋章と荷車が触れた時。

ぴたつ、と荷車が動きを止めた。完全に静止したのだ。

一瞬の出来事に誰も反応する「」ことが出来なかつたが、ペッソだけはこれに反応していた。

「せいつー。」

そのままペッソは背負い投げのように何かを投げる。すると、

渡とエリスは宙を舞つた。

しかもこれまでつけてきたスピードの何倍もの勢いで。

まるで砲弾のように、仰角をつけて飛ばされた二人は、宙を舞つているということを認識できなかつた。

（ああ、俺つて死んだのか……。これから天国に行くんだな……）

死んだとしか認識していなかつた。

それはエリスも同じで、硬く目を瞑つて丸くなつて空を舞つ。

最初に違和感を感じたのはエリスだつた。

浮遊していることに気が付いたのだろう。恐る恐る目を開けると、

きらきらと輝く水面と大きな大きな船の甲板が見えた。

あまりの絶景にエリスは暫らく目を見開いて唾然としていたが、次に目に入ってきた帆船のマストを見て事態を把握した。

「わつワタルさん！ 起きて下さい！」

「ああ、見える……。俺は今天国への階段を上つているんだ……」

「バカなことを言つてないで早く起きてくださいよー。」

エリスに言われて、渡はふつと目を開けた。

渡も、エリスと同様に目を見開いて驚いていたが、やつぱりマストをみて理解したらしい。

口をパクパクさせてから咳き込むように言つた。

「ちょつ、空飛んでるじやん！」

「いや、それよりも……」

エリスは手足をぱたぱたと動かしながら叫ぶ。

「私たち、落ちますよおおおおお！」

大きな放物線を描いて飛んでいた一人だったが、重力がある限り落ちるのが当たり前というものの。そして二人はその『当たり前』から外れることなく進行方向を下へ下へと向けていった。

このまま行けば海に落ちる、という二人の考えは当たつており、一人揃つてこのままいけば一人の身体は海面に叩きつけられるだろう。

「そう、このままいけば。

一人はばたばたと暴れながらさらに下へと落ちていたが、突然強い衝撃が一人を襲い、二人の身体は一瞬だけ完全に静止した。

（ぐあつ……？）

揺らぐ視界の中では必死に思考を巡らせたが、同時に脳も揺れていったためうまく考えが纏まらない。

さっきまでは手足を振り回していたが、今は身体から力が抜けてだらりとしたまま一人は落下した。

かなりの高さをまっさかさまに落ちた一人は、今度はふわっという柔らかい感触に支えられて完全に静止する。

今度はは落下も上昇もなく、一人はふわふわとした何かの上に寝転がった。

ぐらぐらとした視界の中で何とか立ち上がるうとするが、足場が不安定なのと、身体もふらふらしているためすぐに転んでしまう。まるで遊園地の激しく回ったジェットコースターから降りた後のように。

立つことを諦めた渡はふわふわの何かの上に寝転がった。ぐるぐる回る視界には太く聳え立つマストと、何やら仕掛けの上にネットのような物が張つてあるように見えた

（ああ、あれにぶつかって落ちたのか……）

と、無氣力に認識する渡の周りにはクー、クーというカモメの鳴き声と、大きな笑い声が聞こえてきた。

どうにか回復してきた目で起き上がってみると、自分達はさつき見た大きな船の上にいること、自分達の下にあるものがクッショングであること、そして近づいてくる男を認識した。他にも忙しそうに働きながらも笑い声を上げている屈強な男達もいた。

その男は笑顔で近づいてきたが、渡をスルーしてエリスの元に向かう。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

白い歯をキラリと見せながらエリスに手を差し伸べる男。その男も筋肉ムキムキでいかにも船乗り、という感じだ。

「あ、ありがと、いやこまか、……」

男はにこりと笑うと、エリスの手を取つてそのまま立ち去りつとする。エリスはまだぼんやりしているようで、男にされるがままだ。その様子に渡は若干ムツとしつつ、男を呼び止めた。

「おい！ 僕を忘れてるぞ」

すると男は面倒くさがりに、そして心底嫌そうな顔をして振り返つた。

そして何も言わずに空ひでいる左手を差し出す。渡がその手を掴むと男は強引に手を引き、渡を立たせるとぱっと手を離す。

「そ、お嬢さん。とても驚かれたでしょう。いかりでお茶でも……」

「おこー。」

男はすぐにエリスを船内に案内しようとする。エリスも若干困惑しているようで、ちらちらと渡を見てくる。渡も強引な男に向かつて睨み付ける。

男は深くため息をついて肩をすくめ、けだるそつと伸び渡を見た。

「なんだい少年。もう君は立つていられるだろ？。その足でピリヤ

へいきたまえ。そして私の邪魔をするな

「邪魔をしているのはお前の方だる。そいつは俺の連れだ」

「なんと！ 君のような奴隸がこの美しいお嬢さんの連れだなんて……。そんない加減な嘘をつくのはやめたまえ」

「嘘じやねえよ！ ついでに言つと俺は奴隸なんかじゃない。人だけどな！」

「空を飛んでまだ夢を見ているのかい？ いい加減夢から覚めたまえ。そして早く巣に帰りなさい」

「夢も見てねえよ！ しかも何だよ巣つて！ ふざけんな！」

お互に睨みをきかせてぱちぱちと火花を立てる一人。エリスはその様子を身を引いて觀察し、仲裁に入るタイミングを計つていた。すると、エリスの視界の外から一人に向かつて歩いてくる人影があつた。

さつきはよく見ていなかつたが、たぶん度とエリスを投げ飛ばしたペッソという青年だろう。

その青年は一人に近づくと、男の方を思い切り殴り飛ばした。突然の出来事にびっくりする度とエリス。

殴り飛ばされた男は甲板の上を数メートルほど転がつた。そして殴られた頬をさすりながら叫んだ。

「殴つたね！」

どこかで聞いたことがある、と渡は思いながら殴り飛ばした青年

を見た。

改めてみても線が細く、臂もすりつとして中々のイケメンだ。

渡が気が付いて、慌てて青年にお礼を言おうとしたその時、青年は渡には田もくれずにまだ転がっている男に近づく。そして男の腹にもう一、二発蹴りを入れる。

「や、やつす、やじなこですか……？」

慌てて青年を止めようとした渡は、一人に恐る恐る近づく。すると青年は無表情に振り向き、渡にすいつと顔を寄せせる。驚いて顔を引く渡に青年はいまいしばりに言つた。

「こいつは俺が投げた女の密を立つ端から口説いていくんだ。なんかむかつく」

「それだけですか！」

「ああ。別に俺が口説きたい訳ではないが、俺がこいつが女を口説くことを助けてるみたいで、虫唾が走る。こいつのせいで若い客もあんまり来なくなつたしな」

きつぱりと言つて放つた青年に渡は苦笑しつつ、やつすを言ふなかつたお礼を言つ。

「あ、やつすはありがとついたしました。……えつと、ペッシュさん、でしたっけ」

「ほう、さつきの状況で周りの声が聞こえていたのか。中々度胸のあるやつだ。だが、やつすやつたことが俺の仕事みたいなもんだか

ら、別に礼を言われる事はしていない」

それを聞いた渡は素直に思った。

(この人、クールでかつこいい!)

礼を言われても舞い上がる事のない冷静さと謙虚さ、そしてあくまで全て無表情でやつてのけるクールさ、そしてこの姿勢。なるほど、さつきのペッソを呼ぶ声が若干黄色い感じだったのはこれだからか、と渡は勝手に納得した。

そして渡は比べる。さつきの気持ち悪い男と……。

渡がひょい、とペッソの後ろを見てみると、既に立ち上がりてどこから取り出したのか分からぬ櫛で乱れた金髪を整える男がいた。その後切れた口から出た血をハンカチで拭い、汚れた服の埃をぱんぱんと払つてから隅で縮こまっているエリスに向かってウインクをして見せた。しっかりと白い歯も見せている。

その様子を見て渡は呆れを通り越して感心していた。ここまで我を通す人間はそうそういない。恐らく悪い人間ではないのだろう。

(まあ好きにはなれないけどな)

心の中でボツリと呟いた。

そのとき、ペッソが「ほん、と咳払いをして雰囲気を整える。

全てが終わった男もペッソの脇を通り過ぎてエリスの元に向かおうとするが、ペッソに脇腹をどついて止める。

渡はすっかりおびえて隅で縮こまっているエリスを呼び寄せ、よ

うやく四人が揃つた。

「これは失礼しました、おじょ」「黙れ」

すかさず口説きモードに入りつとした男を、ペッシュがこれまたすかさず裏拳で止める。

顔にクリーンヒットしたのをかわる男に、ペッシュはさりげに追撃。腹を殴り、足を払うと男は完全にバランスを崩して転倒した。

「ぐはっー。」

床で苦しそうに悶える男を片足で踏みつつ、ペッシュは頭を下げる。

「うちの船員が失礼しました。」いつも悪気があるわけではないので許してやってはくれませんか？」

「そうなのです！ 私は私の信条に則つて……」

「お前は黙つていろ」

ペッシュは男の顔を踏んで何も言えないようになる。

「あはははは……」

エリスも苦笑しながら一人の様子を見ており、やはり若干引いているようだ。

渡もエリスも顔が引きつっているのを見て、ペッシュは男を踏んでいる足をどけた。

男はがばっと起き上がり、また乱れた髪を整える。それから口を拭つて服の埃を払つて、

「キララ」

再びウインク。さつきのパターンと全く同じだ。その様子に、ペッソはまた手が出そうになるが、渡達が引いているのを見たためか自重する。その代わりに大きくため息をついた。そしてペッソは男の頭に手を添え、

「すみませんでした」

悪戯をした子供もを無理矢理謝らせる親のよう、男の頭を無理矢理下げさせた。

男は反抗しようとしたがペッソに攻撃されるのを恐れたのだろう、おとなしく頭を下げた。

「やつそんな、いいですよ別に……」

「そりですよ。俺たちだってペッソさん助けられたわけですし・・・」

エリスと渡がやつて、ペッソは男を掴んでいた手を離した。『げほげほ、ともせる男。そして苦しそうに言つた。

「なあ、俺もそろそろ血口紹介していいかな。いつまでもただの『男』だと寂しいんだ」

ペッソはその言葉に思い切り不思議そうな顔をしていった。

「お前はたまに何を言つて居るのか分からなくなるな。いつも普通なら出てこなによつた言葉を言つ。それとも俺が殴りすぎでおかし

くなつたか？」

「ははつ、」の俺を心配してくれるのかい？ だが、それは無用だ。男の心配など気持ち悪い以外の感情がでてこない。心配されるならあなたのようないいおじよ……」

男の話し相手がペッソからエリスに変わる前にペッソは男の顔を、今度は平手で叩いた。

パン、と気持ちのいい音が響き、男は身体をひねつて180度後ろを向かされる。

「一度もぶつた！ 親父にもぶたれたこと無いのに…」

「黙つてこらと黙つたはずだ！」

つににペッソの堪忍袋の緒がきれたらしく。きれいな回し蹴りが男の脇腹に直撃し、さつき殴つた時よりもさらに数メートル増しで吹つ飛んだ。

「じりじりと転がる男に田もくれず、ペッソは淡々と黙つ。

「あいつはゲイゼルといいます」

「ちょっと…… それ俺の言葉……」

血口紹介のタイミングを奪われた可哀相な男、ゲイゼルは呻くようこそだけ言つと動かなくなつた。

数秒、三人の間を沈黙が流れる。それからゲイゼルを本気で心配し始めたエリスと渡を見て、ペッソは頭を搔きながらいつた。

「これくらいには日常茶飯事なので、あいつもアレくらいでは死にま

せんよ」

そういうてペッソは動かないゲイゼルの元まで歩き、無表情に脈を測る。一応脈はあるようで、乱暴にゲイゼルを担ぎ上げると、渡たちの元に帰ってきた。その歩みは軽く、重そうなゲイゼルを担いでいても乱れることは無かつた。案外分からぬだけで、ペッソもそれなりに筋肉がついているのかもしれない。

「大変失礼いたしました。……お詫びといつては何ですが、あなた方を目的地までお送りいたしましょう」

ペッソはそのまま一礼するとそう言った。

しかし渡とエリスにとつては動かないゲイゼルのほうが気になる訳で、ペッソとゲイゼルをちらちらと見ている。

そんな二人の様子を見てか、ペッソは困った顔をしながら必死に答える。

「いや、本当にこいつは大丈夫です。だからあなた方はこんな奴のこと気にしなくてもいいのです。さあ、何なりと申し付けください！」

腕を広げて力説するペッソ。

しかしそれを見る二人はもつと別のことを考え始めた。そして、二人揃つてポツリと呟いた。

「「客が来なくなる理由、それですよ」」

その言葉に、ペッソは不思議そうに首をかしげるのだった。

～港町～（後書き）

本当ならゲイゼルなんてキャラは出る予定じゃなかつたんですよ。  
ノリで出してしまいました（汗）  
キャラ独走状態です・・・

そしてまた修正。

今まで出したものも全て修正しました。  
これからはやり直しつかり確認するよう行ないます

渡とエリスの強い要望によつて、ゲイゼルを医務室へと運んだ三人は再び船の甲板に戻つてきた。

周囲には忙しそうに動き回る船員が十数人。さつきまでのやり取りを遠巻きに見ていたようで、今は安心したようにそれぞれの作業に勤しんでいる。

時間もそれなりに経つてしまつたようで、日もさらに傾いている。しかしマホックが到着した様子は全くない。

「イザナギ皇国行きの貨物船ですか？」

一段落した渡とエリスは当初の目的を果たすこととした。  
イザナギ皇国行きの貨物船を探すこと、である。

「ああ、それでしたらこの船ですよ」

ペッソは渡達に聞かれた問いにあつさりと答えた。

渡達は驚きを隠せなかつた。まさかこんなにすぐに見つかるとは思つていなかつたのだろう。

「貨物船つてこんなに大きかつたんですか・・・？」

エリスが恐る恐るペッソに聞く。まだ半信半疑のようだ。  
それは渡も同じのようで、エリスの言つことこいつへへと頷いて  
いる。

「はい。出発は大体荷物の積み込みが終わり次第。あちらまでは一週間ほど掛かります」

「そうですか・・・。まさかこんなに早く見つかるとは思つて無かつたですね」

「だな。こんなに沢山の船があるからもつと時間がかかると思つてたんだけどな」

「運が良かつたですね」

「こいつと微笑むペッソ。ついつい一人は上田遣いでペッソを見る。まだ積み込みが終わりそうに無いので、町で時間を潰していた方がいいと思いますよ」

「確かにこじりあ暇だよな。それに・・・」

「せつしきの方もこつ起き上がりてくるか分かりませんしね・・・」

三人は苦笑交じりに言葉を交わす。ゲイゼルのことを思いでしまつた。

「じつじやあ、ちょっと船を降りて見ようかな」

「そつそつですね。ではまたよろしくお願ひします」

「分かりました。出発の時には鐘を鳴らしますので、鐘が鳴つたら船に戻つてくださいね」

渡とエリスは手を振つてペッソと別れ、船を降りる。その間にも大きな荷物を持った屈強な男達が一人を通り過ぎては船に乗り込んでいく。

ぶつからないように身体を小さくしながら歩き、一人は石畳に足をつけた。

それからきょろきょろと辺りを見回すと、一人が持つてきた荷車はすぐに見つかった。

小走りで駆け寄り、一人の鞄を手に取る。あれだけのスピードで走ってきたのに、中身は無事だ。それもこれもペッソのおかげだろう、と推測する。

心の中で再びペッソに感謝しつつ、エリスは渡に聞いた。

「さて、これからどうしましょつか」

「うーん・・・」

二人はまた辺りを見回してみたが、めぼしいものは見つけられなかつた。

「まあ、適当にぶらぶらしていれば時間も経つんじやない?」

「それもそうですね」

という訳で一人はこの港町を散策することにした。

さつきよりも時間が経つてゐるせいか、周りにいる人はバスケットを持った奥様方から様々な荷物を持った男が多くなつていた。その中には渡達とそう年の変わらないような少年もあり、渡は自

分の世界と異世界との違和感を改めて感じさせられる。

そういうた少年達は渡達のことを珍しそうにちらちら見ながら通り過ぎていぐが、これはこれでさつきよりも恥ずかしかった。

そんなちがいない調子で歩いていた一人だったが、唐突にエリスが切り出した。

「イザナギ皇國ってどんな国なんでしょうね？」

「えつーーーいやあ、どんな国なんだろうねーーー」

女の子に突然話しかけられても、大して異性に免疫を持っている訳でもない渡が反応できるはずも無くあたふたとするばかりだった。その様子を見て、エリスは可笑しそうに微笑んでから続けた。

「昔聞いた話ですけど、なんだか面白い文化があるやつですよ」

「面白い文化？」

「はい。主食がパンじゃなくて何とかつている植物の種子だつたり、水浴びじゃなくて『温浴』つていつてあつたかいお湯につかつたり・・・」

「・・・なんかそれ日本に似てない？」  
（ひたすら）

「そうなんですか？・・・あと、服の文化も違つそつですよ」

「それは見てみないと分からぬけど・・・」

「なんだか髪の色も違つらしこうですよ。」（ひたすら）

「結構カラフルな感

じですけど、あつひはもつと暗に色だそうです

「それって日本だよね！なんかすゞく被つてるよねー。」

急にイザナギ皇國に対して親近感を覚える渡。まだ見ぬ異國に対して心を膨らませる。

こきなり興奮した渡に少し押されつつも、エリスはさりげ続けた。

「茶色とか暗い青とか。でも、たまに白い人もいるわうです。あちらの皇族の方々はみんな白髪なんだそうですよ」

「白髪ねえ。それはそれでかっこいいなー。」

久しぶりの故郷を思い出してさりげ興奮する渡。  
その思いを汲み取つてか、エリスは何を言つでもなくただ渡を見守る。

あれやこれやと騒ぎながら歩く渡は、周りから好奇な目つきで見られていたが、本人は気にしないようだ。

エリスも渡が嬉しそうに叫ぶ様子を見てニコニコとした笑顔のまま渡についていく。

しかしエリスは思い出したように騒ぐ渡に話しかけた。

「あ、でもあつちの国にも髪が黒い人は人間しかいなうそうですから、注意してください・・・」

エリスは忠告を言おうとしたのだが、渡の髪を見つめた笑顔のままかたまる。

テンションが上がっていた渡は、少しだけテンションを落として振り向く。

笑顔のままかたまたエリスを見て、渡は不審に思わずらを得なかつた。

「どしたの？」

渡がおーい、とエリスの田の前で手を振つても反応はない。

頭をぽんぽんと叩いても、髪を少し引つ張つてみても瞬きをするだけで全く反応しない。

渡が諦めではあ、とため息をついたその時。

「あーーー！」

と、エリスは突然叫んだ。

「うわうびっくつした・・・」

渡が身をすくめてびっくつすると、いきなりエリスは渡の手を掴んだ。

渡がそれに反応する前にエリスはどこかに走り出す。とても急いでいるようだ。

「ちよっと、エリスー・びっしたのー！」

渡の問いにも答えず、エリスは渡の手を引いて港町を疾走する。すれ違う人々に驚かれたりもしたが、エリスは全く気にしない。

そのまま走つて向かつた先は、港町の郊外、一軒の店の前だつた。

肩でぜいぜいと息をする一人だつたが、エリスは少しだけ息を整えるとそのまま店に入つていつた。

エリスに完全においでいかれた渡は、エリスを追つて店に入る。

店の中には魔女のような格好をした老婆が座つていた。  
その老婆は冬でもないのに暖炉に火をつけ、その前で転寝うたたねをしていた。

何故か部屋の中は暑くない。暖炉では火が煌々と燃えているのに、その熱を全く感じないのだ。

「おばあちゃん！起きて！」

エリスは椅子に座つて寝ていた老婆の肩をゆでゆでと揺りした。

「んん？ああ、エリスちゃんかいな・・・」

「今すぐ薬作つてください！ちょっと時間が無いんですよー。」

「なんだい・・・。ミーシャちゃんのはもう切れちまつたのかい？」

「いや、今日はミーシャさんのじやないですよー。」

「じゃあ誰なんだい」

老婆はそう言つてエリスの後ろを覗く。

老婆とばつちつ田が合つてしまつた渡は、少しだけ頭を下げる。

「ふん！例の黒髪の野郎かいな・・・。面倒だがエリスちゃんの頬みだし・・・」

老婆はそう言って立ち上がり、店の奥に引っ込んでしまった。その隙に渡はエリスに近寄り、ひそひそと話す。

「あのや、リリベル？」

「ええと、染色屋さんです」

「染色？」

「はい、布とかの染色もしてるんですけど・・・今は髪を染めてもらいます」

渡はジェスチャーで、何で?と首をかしげる。

「えつとですね・・・。イザナギにもエルギスにも黒髪の人はいい訳ですよ。ここに辺ではワタルさんのことを皆が知っているから大丈夫なんですが、異国で黒髪の人があらわついていたら・・・」

「怪しまれる」

「そうです。脱獄の時にも田立つのはあまりよくないと想います。だから・・・」

「髪を染める」

渡はようやく納得したようすで、手をポンと付いた。その様子にエリスもにっこりと笑う。

しかし渡は新たな疑問をエリスに投げかけた。

「せつやの、ミーシャさんのって何?」

その問い合わせにびくつと反応するエリス。きゅうきゅうと田代が泳ぎ、手を合わせてすつすりと擦る。  
えーとか、あーとか声を出しながら、ビリヒカヒツにか言い訳を探す。

その様子を不審に思いながら見る渡は眉をひそめた。

「あつ、気分転換ですよー。髪の色を変えて心を入れ替えるのもいいかなつて言つてましたー！」

「ふーん。ミーシャさんて本当の髪の色は何色なの？」

エリスの言い訳は渡の純粋な疑問の下に斬り捨てられ、傍くも散つた。

エリスは笑顔の形を作つたまま完全に硬直し、瞬きすらもしない。そのうち顔が、サーっと青ざめてきた。

地雷を踏んだ、と直感した渡はエリスの肩をゆすりながら言つた。

「『じめん！ そんなに言えない事なら言わなくていいからー。顔がなんか青いぞ、おい！』

「あ・・・。えと、『じめんなさい』

十数秒の硬直を経て、エリスはやっと解放される。ビリやけり呼吸も止まつていったようで、息を切らしている。

痛いところを突いてしまつた、と渡は反省する。何か深い理由があるのだろう、と無理矢理渡の中の好奇心を押し潰した。

そんなことをしている内に、店の奥から例の老婆の声が聞こえた。

「ほひ、準備ができたよー早く来な！」

気まずい雰囲気に押し流されていた一人は、救世主の元に急ぐ。カウンターを越えた店の奥には先ほどの老婆が立っていた。その側にはどろどろとした液体が入った、まるでドラム缶のような鍋が火にかけられている。しかもその鍋には何故か梯子が立てかけてあつた。

「あの、それは何ですか？」

「めんどくさい若者だね！面倒な説明なんて私やしないよー！」

「これに髪の毛をいれると入れた髪の毛の色に液体が変化するんです。それに浸かると入った人の毛もその色に染まってしまうと言つてます」

老婆に代わつてエリスが苦笑交じりに説明する。

エリスは言いながらも自分の髪をプチッと一本抜き、鍋の中に入れる。

その瞬間、その鍋の中身が変色してエリスの髪の銀になつた。底も見えないような液体は、まるで水銀のようだ。

「さて、服脱ぎな」

老婆のいきなりの大胆発言に渡は耳を疑う。

「え・・・ええ？」

「」の湯につかって全身の毛を染め上げるのさ。分かつたら服脱いで入りな

「いや・・・エリスもいますし・・・」

「わっ私は店番しますよー!」

エリスはぱたぱたと部屋から出て行き、救いを失った渡は必死に思考を巡らせる。

しかし強気な老婆に勝てそうな言い訳も思いつかず、あらあらとするばかりだ。

見かねた老婆は不機嫌オーラをばしばしと飛ばしつつ、置いてあつた椅子に渡に背を向けてどっかりと座つた。

「早くしなーこれでも私や忙しいんだ!」

渡は老婆に感謝しつつも、これ以上何か言われないように急いで服を脱ぐ。

ところで、渡とエリスが着ている服は、軍の制服でも普段着でもない。一応隠密行動なので軍の制服といつのは論外ではあるが。

普通の制服は『魔力糸』<sup>まつよくし</sup>と呼ばれる、魔力を込めた糸で作られており、耐刃・耐魔法に加えて鎧等には負ける)普段着は勿論普通の糸だが、渡達が着ている服の糸は『加護糸』<sup>かじし</sup>と呼ばれている。魔力糸から派生したもので、精霊の加護によつて人からあまり認知されなくなり、さらに体が少しばかり軽くなるのである。服自体にも装備者に身体強化の魔法がかけられるように小さな魔方陣が組み込んであり、外からは見えないところ(特に内側や下着)に様々な仕掛けがある。しかも魔力は大気中から集めるようになつてるので装備者にも負担はない。この服は下着も含めて一着であり、身体に密

着する構造で動きやすさを追求した、芸術品と言つても過言ではない程の完成度を保つていて。

しかしこの服には一つの欠点があった。

一つは防御性能。動きやすさを追求したために普段着と大差ないほども防御性能となつてしまつた。

もう一つは、

(脱ぎにくいなこれー)

着脱がしにくい、ということである。身体に密着した構造があだとなり、こんな欠点が生まれてしまつたのだ。また、様々な仕掛けは一定の手順を踏まないと解除されないようになつており、着脱のしにくさに拍車をかけている。

普段は気にならないような欠点であるが、今の渡にとつては生きるか死ぬかの大問題であつた。

老婆をこれ以上怒らせないために慌てて服を脱ごうとするが、かえつて焦つてしまつて脱ぐことが出来ない。それがさらにも焦りを呼び、悪循環を引き起こしていた。

全く準備が出来た様子が無い渡に、老婆は恵々しげに貰い振りを始める。

それすらも渡の心を揺さぶり、一層慌ててしまつ。

そんなこんなで服を脱ぐだけでも3分近くも掛かってしまった渡は、恐る恐る梯子を上つて鍋の液体の温度を調べる。調度いい感じだ。

つま先からゅつくりと銀色の液体に浸かつていく。

(なんか、ドラム缶風呂みたいだな・・・)

「あの・・・入りました」

思つたことは口には出さず、とりあえず報告をする。

「チツ」

全身で不機嫌を表していた老婆は立ち上ると、側の棚から一字に曲がった筒状の物体を取り出した。

ぐるりと渡に振り返ると、それをずいっと押し付けてくる。

「これ咥えながら潜つてな。私がよしと言つまで」

変なものをわたされた渡は、とりあえず素直に従つて筒の先端を咥えて液体の中に潜る。

感覚で言つと、そのままお風呂に潜る感じだ。だれでも幼い頃に経験があるだろ？。

渡が田を瞑つたまま潜つて、60を数えたがまだ合図はない。いい加減のぼせてきそうだったが、老婆はまだまだ許してはくれない。

それからまた300を数えた頃、渡の耳によりゅく合図が届いた。ぽんやりした頭に加えて鍋の中なので、鍋をコンコンと叩いただけでも頭の奥まで重く響いてくる。

渡はどうにかこうにか這い上がる。粘性のある液体のため呼吸がしつくいが、顔を拭つて深呼吸をする。

その間に老婆は渡の髪を触つたり、わしゃわしゃと撫で回したりしていた。

「ふむ。おかしいねえ・・・」

老婆がポツリと呟き、手で顎をさすった。

「どういふことですか？」

「くらか意識のはつきりしてきた渡は、怪訝な顔をしながら渡の髪を弄つてゐる老婆に聞いた。

老婆は首を傾げながら答える。

「いや、普通ならお前さんの髪もはつせりと銀色に染まるはずなんだけじね・・・まあ自分で見てみな」

老婆はそう言って棚から手鏡を持ってきた。それを渡の前にかざす。

その瞬間渡の田は驚愕に見開かれた。

「なん・・・じや」

渡の髪は灰色になつていた。

正確にはエリスの銀と渡の黒が混ざつた色である。光の当たる角度によつては鈍く光つてゐるよつに見える。見方によつては白髪交じりの若者にも見える。

予想もしなかつた髪の色に対し、渡はしばらく疎然としながら前髪を弄つたりいろいろな角度から自分の髪を眺めたりしていた。しばらくして老婆が渡に機嫌悪そうに声をかけた。

「そろそろいいかね。私も腕が疲れたんだが」

「あ、『めんなさ』ーもういいです・・・」

渡は名残惜しそうに答え、老婆はさつと腕を下ろす。鏡を元の場所に戻すと、老婆は渡の田の前に戻つてきた。そして投げやりに渡に言つた。

「で、もう一回染め直すかい？それともこのままいいかい？」

「え？ どうすることですか？」

「てめえはその髪でいいのかって聞いてんだよいい加減理解しないこのグズ！」

「いいです！」

「わかりやいいんだよ！」

半ば強引に押し切られた渡。言ってしまったからしまった、と思つた渡だったが、今さら申し出ることも出来ずにはがつくなと肩を落とした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3367m/>

---

不幸な少年の冒険

2011年10月6日16時32分発行